英雄の子供たち

ユウキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄の子供たち

【Ｎコード】
Ｎ３１８３Ｑ

【作者名】
ユウキ

【あらすじ】
勇者とその仲間たちは魔王を倒し平和な世界を手にした。そして勇者たちはそれぞれの平和な世界でそれぞれの生活を送ってきた。この物語は魔王討伐から十数年後の勇者たちとその子供たちの平和になった世界でのお話です。

プロローグ

「フハハハハハハハハ！！」

頭には禍々しい角を二本とこの世の者とは思えないほどの醜悪な姿をした人、いや、魔物の王、魔王と呼ばれるものが笑っている。

月明のみの薄暗い廃墟の中、その魔王に6人……いや、7人の影が向かい合っている。くずれた玉座や空が見えるほどに大穴の空いた天井にはシャンデリアらしきものが掛かっていることからおそらく城の中だろう。

「よくぞ我を倒したものよ！！だが時が巡りいつの日か甦り今度こそこの世を暗黒の時代に引きずり込んでくれよう！！」

そう言い残し脚の先から徐々に灰となり消えていく。そこに1人の影が近づいていく。褐色の肌をした赤髪の男である。

突然男の体が光り、大きく膨み一頭の赤い巨大な龍となった。

「この繰り返しはこれで終わりにしてやろう……」

龍は灰となり、いまにも消えそうな魔王を一息に飲みこんでしまった。

「これで終わったのか……？」

金色の鎧を纏った黒髪の女性が龍に近づいていく

「ああ……」

「お父様！朝ですよー」

体の上に誰かが乗っている。おそらくシルフィであろう。

目を開けると木々の隙間から木漏れ日が射している。ここは幻獣の森の中心にある大樹の根本である。

「もう起きているから降りなさい」

「は～い」

白い簡素な服を着た少女が体を下りていく。

「お父様は毎日毎日眠りすぎだと思いますよ！」

「寄る年波には勝てんものだ……」
「お父様は人間の年齢に換算するとまだ２０代くらいですよね？」
シルフィが顔をのぞきこんでくる。あぁ・・・かわいいなぁ。
「ところで何か用があるからこんな時間に起こしたのではないのか？」
「こんな時間ってもうお昼近くですよ！え～っと、お客様がいらっしゃいましたよ。なんでもお父様に用があるとか」
「ん？我に用とはいったい誰だ？」
「よくわかりませんがかわいい妖精さん達でしたよ？ここに龍がいると聞いたのだが会えないか？と……」
「妖精で我に？もしや……あいつか！今は出かけていていないと言い……！」
ふと視界の端に小さな影が見えた気がした。
「お父様！？」
腹部に衝撃を感じた。体が木々の枝を折りながら上空へ放り出される。
「おい！いきなり何をする！」
「問答無用！」
小さな影が下から高速で迫ってきた。
「うぉりゃ！！」
「ちょっとまて！！フィ……！」
目の前に小さな足が見えたところで目の前が暗くなった。

プロローグ（後書き）

外の世界へ

頭が痛い……
目を覚ますと二人の小さな妖精の少女の顔が目の前にあった。
「「きゃあ！！動いた！！」」
まだ幼いためかぎこちない飛び方で、先ほど踵落としをかましてくれた男の妖精、フィルのもとへ逃げていく。
「おお、やっと起きた。久しぶり、レリオス」
フィルがこちらに向かってくる。
「おまえは出会いがしらに踵落としを決めた相手に普通に挨拶ができるんだな」
「じゃあどうやって話しかければいいのさ？それに元々あんたが悪いんじゃないか。あの後ソフィが泣いて大変だったんだぜ？」
「……」
「そりゃ人間は寿命が短いから残されるのはおれらだけどさ……っと」
フィルがシルフィを見た。
「彼女は人間だよな？」
「ああ拾った、俺の娘だ、美人だろ？」
いままで見たこともないくらい驚いた顔をしてこちらを見ている。
「は！？拾った？君が人間を！？……娘！？」
「まあ話せば長くなるが……そういうお前こそ、そこにいる二人はなんだ？」
「ちょ、ちょっと待って！すうぅ～～～はぁ～～～よし落ち着いた！この子達は僕の娘だ！」
ある程度予想はしていたがやはり少し驚きだ
「ほう、ということは結婚したのか？妻はどうした？」
「ああ、結婚したさ。妻は故郷で次の子供を産む準備をしている。ほれこっちにおいでレリオスおじさんに挨拶しなさい」

「おじさんとはなんだ、おじさんとは」
さきほどの2人の妖精が近づいてくる。
「はじめまして、れみぃです」
「みりぃ！はじめまして！」
赤いリボンをした舌足らずながらも礼儀正しい子がレミィ、青いリボンをした元気な子がミリィという名らしい。
「双子なんだ、一応レミィが姉でミリィが妹」
「ああ、こんにちは。シルフィもこっちに来て挨拶しなさい」
シルフィがこっちに歩いてくる。
「こんにちは、シルフィといいます。ところであなたはいったい父とどのような関係なんですか？」
ずいぶんとご立腹のようだ……なぜであろうか？
「僕はフィル。君のお父さんとは昔の仲間・・・かな？君のお父さんのことは本当にごめん！」
フィルが土下座をしている。ふむ、おそらく我を蹴っ飛ばしたの怒っているようだ。
「いや～まいったよ、レリオスが気絶している間に何度か話かけたんだけど全然口を聞いてくれなくて……」
おお……それほどまでにこの父を愛してくれているのか！！思わず顔がにやけそうになる。
「お父様のお仲間？え～っとご友人ですか？」
「おや、話してなかったのかい？うん、まあ親友だね・・・おや？」
妖精の姉妹が眠くなってきたのか、かなり危なっかしくふらふらしている。
「ふむ、家で話をしようか。シルフィ、いいか？」
「はい、じゃあこちらにどうぞ」
いつも寝ている場所の近くにシルフィのために建てた家がある。
「じゃ、おじゃまするよ」

「「おじゃ……ま……しま……す」」
「だいぶ限界のようだな」
家の中に入るため龍の姿から人の姿に変化する。
「二人はそこのベットに寝かせるがいい」
「お言葉に甘えるよ」
「ところで何か用があって来たのではないのか？」
「ああ……そうそう、あの後みんなに王様からかなり広い土地をもらったんだ。そしたら僧侶のアレクがここに学校を作らないかって言い出して今まで頑張ってたんだ。で、だいぶ落ち着いたから久しぶりにみんなで会わないかって手紙をもらったんだ」
「ふむ、学校か……」
「そしてそこに向かう途中の村でこの迷いの森に龍が出るって噂を聞いて、もしかして……って思って探していたらその子に会ったんだ。聞いてる？」
「ん？ああ、聞いてるぞ。ただ、その学校のことだが」
「？」
「娘を通わせることはできないかと……」
「学校……とはどういったものなのですか？」
シルフィが机に飲み物を出しながら聞いてくる。
「え～っと、さまざまなものを学ぶことができるところで、魔法から礼儀作法までさまざまな事をそこで学んで人々を幸せにできる人間を育てることが目的かな？」
「幸せに……ですか」
「まあそんなのは建前で、ただ学ぶのが楽しいって理由で学ぶ人や出世するためって人もたくさんいるんだけどね」
「我はこれを機に森を出て世界を知るのも良いと思うのだが……」
「ちょっと急すぎて・・・今すぐ決めるのは……難しいです」
「まあ、そんなに深く考えなくていいんじゃないかな？とりあえずその学校にレリオスを連れて行くから君もついてきたらどうだい？」

「はい……そのようにしたいと思います」
「出かけるのは明日であろう？いろいろ聞きたいこともあるからこっちに来い。シルフィは早く寝ておきなさい」
家の外に出て変化を解く。人の姿でいると窮屈というわけではないがどうも落ち着かない。
「じゃあ、また明日」
フィルは手を振りながら家の外に出ていく。

翌日
学校から半日ほど離れたところに山があるらしいので、そこまで我の背に乗っていくこととなった。
「相変わらずレイオスの乗り心地は最高だね。」
「おまえは我よりも早く飛べるであろう。自分で飛べ」
「おじちゃんの乗り心地は最高だよね～～？」
妖精姉妹に話しかけている。
「「うん！！」」
クスクス
「……」
シルフィが楽しそうであるからまあよいか……

3時間ほど経ったころだろうか、小さい山が見えてきた。
「降りるからしっかり？まっておけ」
山の木々の少ないところを探し着陸する。
「さすがレリオス。僕たちが1週間近くかけて行こうとしていた道のりをたった3時間だ」
「早く行くぞ。向こうに着くのが夜になっても困る」
人の姿に変化する。
「なんど見てもでたらめな魔法だねぇ」
「お前の方がよっぽどでたらめだろうに」
フィルは身体強化の魔法を得意としている。本来は初歩の初歩の

魔法であり優秀な者でも自らの力の二倍程度しか強化できない。しかしフィルは非力な妖精の身でありながら龍族をも超えるほどの強化をやってのける。

「ところで、なにやら囲まれているようだが？」

「この匂いは……狼だね。あれ？……いや気のせいか」

周りの木々の隙間から狼たちがこちらの様子を窺っている。あたりに骨が散らばっていることからおそらく縄張りに入ってしまったようだ。視認できる個体だけでも１０匹以上いる。

「……大丈夫よ……大丈夫」

シルフィが妖精姉妹を腕の中に庇いながら震えている。さっさと追い返した方がいいか。

「ふん……」

狼たちを威嚇するように睨みつける。すると狼たちは何か恐ろしいものを見てしまったかのようにパニックになりながら逃げて行った。

「ん……？」

毛並が若干違う一匹が逃げる時に一瞬こちらを見たように感じた。

「……気のせいか」

「ほら、もう大丈夫だよ。娘たちを守ってくれてありがとう」

フィルがシルフィたちを慰めている。

「狼を初めて見ましたが……あんなに恐ろしいものなのですね・・・」

「僕たちがいればまず大丈夫だけど早く山を抜けた方がよさそうだね」

「ああ、そうだな」

山を下り、街道に出て歩くこと数時間、太陽が地平線に飲み込まれようとしている。

「あれがそうか？」

「そうみたいだね……」

「すごい……」
「「おお〜〜」」
「これほどの建造物の群れを我は初めて見たぞ……」
「あんなに何もなかった土地をたった十数年でこんなにしてしまうなんて、やっぱり人間はすごいなぁ」
白を基調とした塔や城のような建物が大量に乱立し、上空には見たことのない乗り物のようなものが行き来している風景が広がっていた。二人は過去さまざまな国を旅していたが、今まで見たことのない風景に圧倒され、日が沈みきるまでその場を動くことができなかった。

リオール学園

ふと気付くとあたりは暗くなってしまっていた。だが目の前に見える学校（もはや都市と言ってしまってもよいだろう）はおそらく魔法の光であろうか？建物のあちこちから光が漏れ出ている。

「とりあえず早く中に入ろうか」

学校はほとんどの都市と同じように石の壁にかこまれているようだ。白を基調とした壁に門が見える。

「リオール学園にようこそ。学園にどのようなご用件でしょうか？」

門の前で簡素なローブを着た女性が声をかけてきた。おそらく門番であろう。

「アレクからこんなものをもらったんだけど……」

フィルが門番に1枚の小さな紙を見せる。

「学園長から窺っています。フィル様とそのご息女様ですね。後ろの方々は……」

「ああ、僕の仲間とその娘だよ。え～っと学園長ってアレクだよね？アレクとも知り合いだから気にしないで」

「わかりました、ご案内いたしますので少々お待ちください」

門番が少しの間目を閉じる。

「ではこちらへどうぞ」

門を閉ざしていた扉が開く。門番について中に入ると入れ替わりのようにローブを着た者が外に出ていく。先ほど通信魔法で交代の要請をしたようだ。

門番が手をあげた。すると先ほど外からも見えた上空を飛んでいる乗り物の一台が下に降りてきた。窓のついた金属の箱のようで、魔法の力を強く感じる。外見は他の飛んでいる物よりも若干豪華な作りであるように感じる。

箱に切れ目が入り入口ができる。

「どうぞお乗りください」
中には長椅子とテーブルが備え付けられていた。外から見たよりも中はだいぶ広く感じる。
「うわぁ、すごいです！これが空を飛ぶのですよね？」
シルフィが珍しくはしゃいでいる。そんな娘の様子を見るだけでここまで来てよかったと思える。妖精姉妹は感嘆の声をあげながら箱の中を探索している。
「……龍のときはわからなかったけど、親だねぇ」
フィルがにやにやしている。
「うるさいぞ……」
椅子に座ると思いのほか心地が良かった。反対側の席に門番が座ると画面が浮かびあがった。その画面を操作すると再び入口が閉ざされ宙に浮かびあがった。シルフィは妖精姉妹と一緒に窓にくっついている。
「フィル様……握手させてもらってもよろしいでしょうか？あとお隣の方の名前も聞かせて頂いて構わないでしょうか？」
門番が目を輝かせている。
「ん？別にいいけど？さっきからにやにやしているこの男はレリオスだよ」
「いい加減にしないと食ってしまうぞ」
「おお怖い怖い」
フィル笑いながらは門番の前まで飛んで行き握手をしている。
「レリオス様・・・ということはあの龍のお方ですよね！？ああ……この世界を救った英雄に一日に二人も会えるとは！！ああ……神よ……」
今にも倒れそうなほど興奮している。先ほどとのテンションの差に思わず引いてしまう。窓の景色を見ていた娘たちも何事かとこちらを見ている。
「……ゴホン。失礼いたしました。私はこの学園の治安をまもる組織の副長を務めさせて頂いている　アレーヌといいます。これか

ら皆様を学長の基までご案内させて頂きます。質問や要望などがございましたら、遠慮なくお申し付けください。」

３０分ほどこの学園やこの乗り物についての話を聞いていた。すると

「そういえば、先ほどの世界を救ったって言葉が聞こえたのですが何のことでしょう？」

シルフィが不思議そうに首をかしげながら質問した。

「おや？え～っと」

アレーヌが困った顔をしてこちらを見る。

「別に隠しているわけではない。言ってもかまわん」

そう言うと門番は誇らしげに語りだす。

「今からおよそ１５年ほど前にこの世界は魔王が存在していたことは知っていますか？」

「はい、精霊さん達から聞いたことがあります」

「精霊と意思の疎通とはさすが……。え～っと、あまり時間もないので大ざっぱに言ってしまいますとその魔王を倒した七人の英雄がおりまして、その内の二人があなたのお父上とフィル様なのです！！魔王は何度倒しても数十年経つと復活してしまうのですが、なんと！この方たちはそれを防ぐ方法を発見し、それに成功なされたのです！！あと学長もその内の一人です」

「魔王を倒したのってお父様だったのですか！？」

「すご～い！！」

妖精姉妹は意味がよくわかってないように見える。

「我はそれほど大きなことはやってないがな」

「復活阻止の呪文作ったのは君じゃないか。僕なんて魔王にアッパーを１発食らわせただけだよ。」

「ほとんど直接触ることはできなかったかもしれんが奴の障壁をお前が崩し続けてくれたからこそ勝つことができたのだ。それにあの呪文は……」

「お二人はどのような冒険をなさって来たのでしょうか？」
キラキラした目で見てくる。そのような目で見られても困るのだが……
「その話は今度時間があるときにしてやろう。ほれ、もうすぐ着くようだぞ。」
学園の中心にある城のような建物のテラスに到着した。下を覗いてみるとかなりの高度がある。
「では、こちらにどうぞ」
建物の中に案内される。内装は簡素であるがどことなく神殿を思わせる作りとなっている。少し歩くと木でできた扉の前にでる。
「お客様をお連れいたしました」
アレーヌが扉をノックすると中から返事がきた。
「どうぞお入りください」
アレーヌは扉を開け、我々を中に入るよう促すと中には入らずに扉を閉めた。
中には一人の神官の服を着た３０代くらいの品のいい男が椅子に座っている。
「お久しぶりですね。フィル、そしてレリオス。門番から連絡を聞いたときは驚きましたよ。初めましてレミィちゃん、ミリィちゃん。そしてシルフィさん、この学園の長を務めさせて頂いている、剣の神スライ様の神官のアレク＝サンクレイドです。」
姉妹はシルフィの顔を挟むように両肩に乗っている。そして姉妹は深々と、シルフィは姉妹を落としてしまわないように軽く会釈をした。
「久しいなアレク」
「久しぶり、アレク」
「いろいろとお話ししたいことがあるのですが長旅でお疲れでしょう、部屋を用意したのでお嬢様がたはそちらでおくつろぎ下さい。アレーヌお願いします。」
扉が開きアレーヌが顔をのぞかせる。

「ではお嬢様方はこちらへどうぞ」
「またあとでね」
フィルが手を振っている。
「行きなさい。おそらく話は長くなる」
たぶんアレクお得意の長い説教がはじまるのであろう。そして実際、説教を受けるだけのことを行った自覚はある。
「はい、わかりました……」
見知らぬ土地で我と離れるのが心細いのであろうか？不安そうな顔をしながらシルフィ達はアレーヌに従い部屋を出ていく。
「さてと」
アレクが目を閉じると天井に2つの穴が開き魔法文字を書き込まれたメイスをもった男と同様の文字が書き込まれた短剣をもった女が落ちてきた。
「ん？」
女の方の姿が突然揺らいで消えた。後ろに気配を感じた、前に転がるように回避する。体制を立て直そうとしたが、目の前にメイスを振りかぶった男が見えた。
「お前らは……！」
男は愛嬌のある笑みをみせると
「ごめんな」
メイスを振りおろした。するとメイスの文字が宙に浮かびあがり、レリオスの体の周りを囲んだ。そして女がナイフの背をレリオスの体に触れさせると同様の現象がおきた。レリオスはほとんど身動きを取ることができなくなった。
再び天井に穴が開くと12、3歳くらいの少女とドレスを着た女が落ちてきた。そして少女がぶつぶつと呪文を唱えながらレリオスの周りに魔法陣を書いていく。そして少女がレリオスの頭に手を置くと、レリオスの体が光輝きだした。
「おい、お前らなにを～～っ！」
光の輪郭が徐々に小さくなっていく。人の頭くらいの大きさにな

ると、光が強くなり大量の煙を出して爆発した。
煙が晴れると……そこには小さな龍のぬいぐるみが転がっていた。

変わらないやりとり

「よお！久しぶり！」

先ほどナイフで襲かかってきた女が笑いかけてきた。燃えるような赤髪と、この口ぶりからしておそらくレイナであろう。髪を伸ばしたようだ。

「おお、ずいぶん小さくなったなぁ」

メイスで襲いかかってきた方が頭を撫でてくる。いたずらっぽい顔は変わらないがどことなく貫禄が出てきている。ルークだ。この名前は偽名で本名はシルベイン＝クリスタニア、王族だ。

「あらあら、私が出る必要はなかったみたいね？」

ドレスを着た女だ。長い黒髪で気品のある立ち振る舞いから貴族であろうか？二人で抑えられなかった時の保険まで用意していたのか。……こいつは誰だ？　ルークの関係者だろうか。

「ふふふふふ……ついに捕まえたぞ」

不気味に笑っているのは魔法使いのソフィだ。さきほど１２歳くらいと思ったが……上げ底靴のようだをはいているようだ。だとすると昔と何も変わらない１０歳に満たない姿のままのようだ。こいつは本当に人間なのだろうか？

「ははは！すごいことになったね。それにしても、みんな集まってたんだね」

フィルが笑っている。こちらとしては笑いごとじゃない。

「ルーク達が来ていたのはたまたまですが、他の人たちはこの学園で働いていますからね。大急ぎでこの部屋に呼んだのですよ。アレーヌにも少し時間稼ぎをしてもらいました」

アレクが答えた。

「いったい何のつもりだ？」

アレクを睨みつける。

「ソフィに頼まれました。断る理由もありませんし、あなたには

言いたいことがたくさんあるので、逃げられないようにしてもらえれば大変都合がいいですから」
アレクはうそぶいた。
「それにしても俺ら全員を勝手に不老不死にしようとするとはな。せめて断ってからにしろよ。まあ俺ら全員断ったと思うけどな」
ルークは肩をすくめ、あきれている。
魔王を倒してからすぐのことであるが、ついに龍の秘薬を作ることができた。人数分足りなかったので薄めてしまったからおそらく完璧な効果とはならなかっただろう。それに不老不死ではなく龍と同程度の寿命を得るだけである。断られることはわかっていたので、寝こみを襲ったら返り討ちにされ薬を燃やされてしまった。次に完成するのは今から準備し始めても１０００年はかかるだろう。
「それにソフィの面倒を見る約束もしてたんだろ？」
レイナがため息をついている。
「それを失敗したらそのまま姿を消してしまうなんて無責任にも程がありますよ？」
ドレスを着た女が困った顔をしている。いろいろ知っているようだが本当に誰だ？
「ところでお前はだれだ？」
「あら？ああ、王宮暮らしが長くてな。ついこの口調で喋ってしまった。あとこの化粧を落とすとだな」
ドレスを着た女が部屋を出ていく。ああ、あのしゃべり方はウェルナか？変われば変わるものだ。神の血を引いているといわれていた滅びた王国、アレクルードの王族の生き残りだ。周りからは勇者と呼ばれていた。
「レリオス～」
ソフィが我を抱き上げて頬をこすり付ける。
「お前全く変わってない様だが、薬は全部燃やされたんだよな？」
ここまで変わらないともしや飲んだのではないかと疑ってしまう。
「ん？飲んではないけど実は……」

胸元からお守りのようなものを取り出す。その中には球形のガラスのような入れ物の中に我の作った秘薬が入っていた。
「「「「「は！？」」」」」
ソフィは秘薬を隠し持っていたようだ。でもなぜであろうか？
「レリオスが取り残されるのが嫌みたいだから一緒にいてあげようって思って……」
視界が歪む、ぬいぐるみの体でも涙はでるようだ。
「大きくなったら飲もうと思って今まで持っているんだけど……なぜわたしは大きくならない！！」
アレクを除き、笑いを堪え切れず、吹き出してしまう。だが、アレクは渋い顔をしている。
「無理に止めるようなことはしませんが、人にはそれぞれ神によって決められた時間があるのです。そのような薬でもって天命をゆがめるのは……」
説教が始まった。どのくらい長くなるのであろうか？ソフィは我を床に置き、耳を塞いでいる。ふと、扉の音が聞こえた。ウェルナが戻ってきたようだ。扉を開け、入ってきたウェルナを見ると、若干老けているが昔と同じ、先ほどの化粧をしていた時の様な優雅な美しさではなく、勇敢な戦士のような美しさを感じさせる。
「なんでレリオスじゃなくてソフィへのお説教が始まってるんだ？」
「我の作った秘薬をまだ持っていたらしい」
「あ、ばれたんだ？」
「知ってたのか？」
「あの薬は結構独特の魔力が込められてるからな。気配でわかる」
「お前はあの薬どう思うか」
「ん？」
「お前はやはり飲みたいと思わなかったのか？」
「ああ、いらないな。理由を言えと言われたら難しいな。まあ、なんとなくだ」

「なんとなく・・・か。まあ、我もやって良いことであるとは思ってない。」
ふと時計を見ると八時過ぎとなっていた。
「そろそろこの悪趣味な魔法を解いてくれないか？ソフィ」
この魔法は下手に解くと術者の命を危険にさらす作りになってるように感じる。おそらく我に解かせないためであろう。あいかわらず無茶苦茶な奴だ。
「ん？ダメダメ！また逃げられたらどうするのさ？」
「どうするのさ？と言われてもな……」
「とりあえずこの指輪をしてみてよ」
指輪をはめられた。そしてソフィが呪文を唱えると体が膨らみ、龍の体となった。
「よし、成功！！」
「なんだこれは？」
「え～っと、ほらこの指輪と」
ソフィが自分の指にはめている指輪を見せる。
「その指輪は対になっていてね。こっちの指輪をはめて姿を想像しながらつぶやくと、その指輪をはめている者の姿を自由にできるのだ！！」
腰に手を当てて、誇らしげに胸を張っている。指輪を外すと元のぬいぐるみの姿に戻ってしまった。
「それにほらほら！リングの裏側にはお互いの名前が掘ってあって、まるでけっこ……あ……」
「ソフィ……？」
アレクが顔をひきつらせている。周りを見ると部屋の中は我の体に潰された机や石像、椅子に本棚。さまざまな物が散らばり、見るも無残な姿になっていた。
「ちょ、やめ！やめてぇ～～！！」
ルークはフィルを肩にのせやれやれといった体で、ウェルナは我を抱き上げ、レイナはクスクスと笑いながら、それぞれ悲痛な叫び

声の聞こえる部屋を退出した。
「クククククッ」
思わず笑いがこみ上げてきた。
「あれから15年以上経っているのにみんな全然変わってないよね」
フィルも笑っている。
「ウェルナは最初、本気でわからなかった。」
「僕はウェルナが子供を産んだときに一度会ってるから、それほどでもなかったかな？」
「なんだ、ウェルナ結婚したのか？」
ウェルナとルークが楽しそうに笑っている。
「ああ、ルークと結婚したぞ」
「ほう！それはめでたい！」
「あとはアレクとレイナも結婚しているな」
ウェルナが言った。
レイナは頬を赤く染めている。
「おまえがあの堅物と結婚とはな、もう完全に盗賊稼業は廃業か？」
「……うん、子供に悪い事やってんのは見せられないし」
「子供もいるのか、今日は何ともめでたい日だ！」
柄にもなくうれしくなり、感情が昂ってしまった。
「少々恥ずかしいが、こういった時の龍族流の祝い方があるのだが・・・いいか？」
「ん？祝ってくれるならうれしいけど……なんだい？」
ウェルナが尋ねる。
「まあ、ちょっと待ってろ……」
限界まで口を開き吠える。
夜の学園に聞くものに嬉しさを感じさせる不思議な音が響き渡る。

甲高く、しかし澄んでいて心地よい、笛のような音であった。

その夜にて

あの後もう遅い時間だからと、それぞれ用意されていた部屋に戻ることになった。ぬいぐるみ姿のままでは困るので、学長室の前に倒れていたソフィに人間の姿にしてもらい、フィルと共に娘たちのいる部屋に案内してもらった。扉を開けるとベッドの上で娘たちは何やら熱心に語りあっていた。ソフィはすでに寝間着に着替えている。

「あの噴水きれいでしたね！！」

シルフィが手を合わせ目を輝かせながら語る。

「噴水から出る水が7色に光ったり、水がまき戻ったりとあれはどのような仕組なのでしょう！？アレーヌさんの話では光を放つ魔法しか使われていないとの話ですが本当に不思議です！」

妖精姉妹も目を輝かせながら相槌を打つ。

「うんうん、すごかったね！！」

「わたあめ、ふわふわ～」

ミリィの方は綿あめを食べるのに夢中のようだ。顔がベタベタになっている。

「やあ、ただいま」

フィルが姉妹の許に飛んで行き、懐からハンカチを取り出して拭ってやっている。

「シルフィ、学園を案内してもらっていたようだな？」

「はい！とても面白いものたくさんあって、今日一日では全然まわりきれませんでした。学校とはこんなに大きいものなんですね！」

「いや、ここは学校を中心にしてはいるが最早一つの都市だ。ここは例外だと思っておいた方がいいぞ」

「え、そうなのですか？それにしても明日も案内して頂けるそうで、楽しみで全然眠れそうにないです」

「ふむ、ここが随分と気に入ったようだな？・・・その入学とかは

どうだ？」
「入学は……この学園は面白そうではあるのですが、お父様と離れ離れになってしまうのでしょうか？」
「おそらく我もここにいることになるだろうな」
ソフィからもらった指輪には効果範囲があるらしく、ソフィから離れすぎると効果がなくなってしまうらしい。一応この学園内を余裕でカバーするだけの範囲はあるという話なのでつまりは先の魔法と合わせて我を拘束するつもりだろう。
「え、そうなのですか！？」
不安そうな顔から一転、とても嬉しそうに顔を綻ばせている。おそらくこれで入学の決心はついたであろう。
コンコン。扉からノックの音が聞こえた。
「アレクです。失礼してもよろしいですか？」
「別にかまわないが何の用だ？」
アレクが扉を開け、入ってくる。
「いえ、少々あなたにお願いしたいことがありまして」
「ああ、丁度良い。こっちにも頼みたいことがある」
「急ぐ用事ではないので、先にどうぞ」
手振りでシルフィを傍らに呼んだ。すぐに傍に来たが緊張しているようだ。顔が強張っている。
「娘をこの学園に入学させたいのだが構わないか？」
「はい、それは大変喜ばしい事なのですが、どのようなことを学びたいのですか？」
あアレクはソフィへ尋ねた。
「いえ、その……まず、何を学べるのかもよくわからなくて……」
「ふむ、希望がないようであればとりあえず、中央校舎で学んでいただきましょうか」
「中央校舎とは……確かここでしたっけ？」
「ああ、アレーヌと見学をしていたのですね。この学園はこの校舎を中心にして、無数の塔が建てられています。この塔はそれぞれそ

の道を究めようとしている者達によって運営されています。その塔の数は……すみません、学園を治める者として恥ずかしいことなのですが……わからなくなってしまいました。ちょっと増減が激しすぎまして・・・」

アレクは苦笑いをし、胸のあたりをさすっている。ずいぶんと苦労しているようだ。

「え～っと、確か魔法系の人達と建築系の人達がどんどん勝手に建ててしまうんでしたっけ？」

「アレーヌはそこまで話してしまいましたか。まあ……仲が良いのはいい事なのですがね・・・ああ、すみません。話が逸れてしまいました。中心校舎は剣や魔法はもちろんのこと、歴史や言語などの基礎教養など幅広く教え、自分の学びたいことの手助けをします。学びたいことを見つけたらそれぞれの塔へ登録すれば、より深くそれについて学ぶことができます。中にはいくつもの塔に登録する人もいますね。まあ詳しい説明は入学式で行われますので、そちらの方がわかりやすいでしょう」

「入学式はいつなのですか？」

「来月の初めに行います。入学に合わせて、入寮の手続きなどを行いますので、それまでゆっくりしていてください」

「はい、ありがとうございます」

「では、そろそろこちらの要件を話しますね。レリオスにこの学園の教師として壇上に上がってもらいたいのです」

「……は？我に何を教えろと？魔法はあいつの方が出来るではないか？」

「確かにソフィは魔法の天才でしょう。しかし、基礎くらいなら何とかなるんですが……。あの人は魔法を何となく、で使えてしまうようで、教師にはとても向いているとはいえないのです。それにあなたはこの世界の歴史や魔物、幻獣、動植物にいたるまで、かなりの知識を持っているではないですか」

二千年も生きればそれなりに知識はつくものだ。ソフィに色々な

事を教えてはいるが、まさか教師になれと言われるとは全く想像していなかった。
「いきなりは難しいでしょうから、しばらくはソフィのサポートをお願いすると思います」
いきなりすぎて考えがまとまらない。いや、まあシルフィと一緒にいられるならまあそれもよかろう……いやいや、龍を教師として迎え入れるとはいったいこいつは何を考えているのだ。我は娘が友人と共に勉学に励むさまをのんびりと眺めていたかっただけなのに。
「あなたもそのような顔をするんですね・・・失礼、ククククク」
口元を抑えながら後ろを向いて震えている。それほど笑うような顔をしていたのだろうか？シルフィを見ると首を傾げて不思議そうにしている。
「……」
「ああ、本当に失礼しました。入学式までまだ時間がありますので、それまでに答えを聞かせてください」
「ああ、まあ考えておく」
「では、夜分遅くに失礼しました……おお、いい忘れるところでした。明日の夜に再開を祝して軽いパーティを開きますのでお昼は食べ過ぎないでくださいね。」
一礼して部屋を出ていく。我に教師とは……本当にどうすればよいのか……
シルフィがベッドを整えながら聞いてくる。
「お父様が教師になるのですか？」
「いや、断るつもりでいるのだが」
「え……ならないのですか？お父様にいろいろ学べると思っていたのに」
とても残念そうな顔をしている。ああ……シルフィよそのような顔で父を見るな。
「お前には森の中でもいろいろ教えていただろう」
「いえ、お父様は寝てばかりで殆ど精霊さんたちに教わっていまし

たよ」
今度はジト目で見てくる。いや、まあ眠いのだからしかたがないと思うのだが。
コンコン。また来客のようだ。扉が開き小さな女の子、いやソフィが入ってきた。
「人間の姿にしてあげたのにそのまま放置とは酷いじゃないか！」
「そもそもお前が我をぬいぐるみにしたのではないか」
「そんな事を言う奴にはこうしてやる！」
体が縮み、再びぬいぐるみの姿にされた。
「ふふふふふ。どうだ、参ったか！」
「え～っと、これがお父様ですか？」
「おお、君が噂のレリオスの娘か！！初めまして！わたしの名前はソフィ＝エルラント、お母さんとよ・・・ってうわ！熱い！」
ふむ、この体でも炎は吐けるようだ。ソフィの顔は煤で真っ黒になりブスブスと音を立てている。
「なにするんだよ！」
「おまえこそ何を言っている」
「どうせ将来そうなるんだからいいじゃないか！」
ソフィが首を傾げて聞いてくる
「え～っと、先ほど話していた魔法の先生・・・ですよね？お父様と結婚するんですか？」
「そうそう！おおシルフィちゃんは話がわかるようだ！」
シルフィがソフィに近づくと、頭をなでながら声をかける。
「こんなに小いのに先生なんてすごいですね～。でもお母さんになるには、少し早いから、たくさん食べて、大きくならないとね」
たぶん完全に子供だと思ってるのだろう。
「シルフィ、そいつは一応二十歳は超えているぞ」
シルフィは凍りついた。ソフィの顔がだんだん赤くなっていく。
「はっはっは！もうわたしは大人だから失礼なことを言われても笑って対応できるのだ！」

顔は強張っていて、目は涙目だ。相当傷ついているようだ。
「一応謝っておきなさい」
シルフィは大慌てで頭を下げた。
「本当にごめんなさい！！」
ソフィの両手をとって謝る。まるで大人が小さい子に謝るように。
「・・・うわ～～～ん」
泣いた。そして走って部屋を出て行ってしまった。まあ、静かになったのでこれでよかったのかもしれない。
「ああ、私はなんてことを・・・」
「それほど気にする事はないが、あとでちゃんと謝っておきなさい」
「はい・・・」
ふと、自分がぬいぐるみのままであることに気付いた。
「せめて元に戻してから出て行ってくれればよかったのだが」
「お父様、ずいぶんかわいくなっちゃいましたね」
そう言うと、我を抱き上げた。
「こら、やめんか」
「このままだと動きにくそうですから。私がベットまで運んであげます」
ずいぶんと嬉しそうだ。
「ところでフィルたちが随分静かだが？」
「あれ？そういえば全然話し声が聞こえませんね」
妖精用に用意された、ベッドの脇にある小さな棚の上にある小さなベッドを見ると親子揃ってすやすやと眠っていた。
「よくあれだけの騒ぎの中で眠れるものだ」
「ふふっ、いきなりお父様を吹き飛ばしたのには驚きましたが、フィルさんも寝ているとかわいいですね。ふぁ～、もう寝ましょうか」
シルフィが我を枕の上に置き、ランプの光を消す。そして我を抱きながらベッドの中に入っていった。娘に抱かれて寝ることを滑稽に思いながらも悪くはない・・・そのように思った。

王女とその従者

「ああもう！レティはどこに行ったんだ！！」
おれは護衛兼お目付け役兼遊び相手であるため、レティと共にリオール学園に入学することになった。レティというのは本名レティレシア＝クリスタニア、王女様だ。ついさっきまでは一緒に学園を見学していたのだが……ちょっと目を離している隙にいなくなってしまった。だがまさか、手を繋いでいたのにいなくなるとは……。父上の言っていた王家には代々伝えられている技術があるのではないかという意見に思わず賛同したくなる。
レティを探しながら歩いていると噴水の傍に人影が見えた。レティだ。身に着けている白のワンピースと白い生地に青いリボンを付けたつば広帽は噴水から放たれる光で七色に輝いている。
「おい、レティ！勝手にいなくならないでくれよ！！」
「あれ？ヒューだ。やっほー」
逆行となって表情は見えないがおそらく満面の笑みで手を振っているのだろう。
「やっほー。じゃなくて！側から離れないように言ってるじゃないか！」
「いや、だって綺麗だと思わない？」
悪びれる風もなく聞いてくる。毒気が抜かれてしまう。
「はぁ、まあこの噴水が綺麗なのは認めるけどさ。そろそろ１６になるんだし、そろそろ自分の立場を考えて行動してくれよ……」
「うん、でも父さまがわたしと同じ年の頃は城を抜け出し魔王退治をしていたんだよね？それを考えるとわたしはまだおとなしいほうじゃないかなぁ……うん、ごめん」
思いっきり睨みつけてやった。一応謝ってはいるが本当に反省しているのだろうか？
「そろそろ、戻らないとまたウェルナ様に怒られるぞ……ん？」

レティの頭の上に何かが乗っている。なんだろう小さな……人？
「頭の上になにかのっているぞ？」
「え？なに？」
レティは頭の上に乗っかっている小人をつかんだ。
「きゃあ！」
小人が悲鳴をあげた。レティは手の中にいる小人をまじまじと見つめる。
「あ！もしかして妖精さん！本で見たことはあるけど、うわぁこんなに小っちゃいんだ！」
おれも妖精を初めて見た。４枚の綺麗な羽を持ち、短めの髪の毛に青いリボンを付けている。レティに掴まれている妖精は怯えているのか、ブルブルと震えている。
「レティ、怯えているぞ」
「あ、ごめんね」
手をひろげ、妖精を手のひらにのせる。そうすると、妖精も少し落ち着いたのか震えがおさまった。
「君はどこから来たの？なんという名前なの？」
レティがそう聞くと
「……ミリィ」
ミリィという名前らしい。あっち、と言いながら噴水の方に指を指す。噴水の向こう側に複数の人影が見える。その人影が大声で何かを叫んでいる。ミリィの名前が聞こえることからおそらくこの妖精を探しているようだ。
「連れて行った方がよさそうだ」
「うん、そうだね」
噴水の反対側まで歩いていくと
まずミリィと色違いの赤いリボンをしている妖精が目に入った。そしてその妖精を頭に乗せた女の子と、入口で見た門番と同じ服装をした女性が心配した顔でレティの名前を叫んでいた。女の子はおれたちと同じくらいの年齢だろうか？

「ミリィというのはこの子のことですか？」
レティが手のひらの上にいる妖精を見せる。
「あ、ミリィ！もう勝手にどこかに行ってはだめじゃない！すみません、ミリィが迷惑をかけてしまったようで」
女の子がミリィを受け取り頭の上に乗せた。頭の上で赤いリボンの子がミリィを叱っている。
「私からも礼を申し上げます。本当にありがとうございます。え～っと、レスティ様とヒュージクリフ様ですよね？」
おや？おれたちの名前を知っているようだ。ちなみにレスティはレティの偽名である。基本的にこの国はかなり治安が良いが、王族であることを周りに知られるとなにかと不都合がある。
「はい、そうですが……あなたは？」
「この学園の治安を守る組織の副長を務めさせて頂いているアレーヌと申します。あなた方のことは学長から聞いております。」
「えっと、たしかガーディアンでしたっけ？」
「一応そう呼ばれていますね、正式な名称ではないのですがそちらの方が通りが良くなってしまいました。……おや？」
突然噴水の周りから水が噴き出て、光輝いた。噴水の中央部に光によって時計が描き出された。そして時計の針が動き、ちょうど七時となった。それと同時に今まで聞いたことのないほどきれいな音が響き渡った。笛の音だろうか？なんとなく気持ちを昂らせる音だ。・・・時計でおもいだしたが、まずい、６時ぐらいには戻ると言っていたのに。
「あ！すみません。急ぐのでここで失礼します。レティ！いくよ！」
あ、敬語忘れてた。学長から聞いたということは、おそらくおれたちの身分を知っているだろうけど……まあ、いまさらか。レティと二人だけの時やレティやおれの家族だけのときは砕けた言葉で話すが。おれたちの身分を知っている人たちの前では、レティに敬語で話すようにしている。レティたちは気にしないどころか、敬語をやめろといってくるが、従者が王族にこのような喋り方をするのは、

本当はまずい気がする。
「あ、ちょっと待ってよ！ヒュー」
レティは何かを呟いた。身体強化の呪文だ。レティは運動が苦手なわけではないが、最近新しく覚えた魔法を使ってみたいようだ。
「やっぱり便利だな」
「ヒューも魔法もっと勉強すればいいのに！」
「おれは剣の修行で忙しいんだよ！」
おれの家系は代々王族の剣技指南役をやっている。剣技に関しては父に認められているが、魔法に関しては全くと言っていいほど才能がないようだ。忙しいなどと言ってはいるが、本当はある程度学ぶ努力はしている。いくら剣士といえども上級の者になれば魔法を使えるものであるから、結構コンプレックスに思っている。
どちらが言い出したわけでもないのにいつの間にか部屋までの競争となっていた。結果はおれの勝だった。そもそも鍛え方が違う。魔法を使われたからといってそう簡単に負けてたまるものか。……おれは何をむきになっているんだろうか。
部屋に着くとまだ誰も帰ってきていなかった。昔の仲間と会うと仰っていたので、多分話が弾んでいるのだろう。おかげで助かったといえるだろう。まあ、怒られるのはレティなのであまり気にする必要はないのだが。
「ああ、負けた〜〜」
「剣士に足の速さ勝負を挑むのが無謀だと思うけどな」
「いやいや、魔法で強化したのに負けるということは、わたしの魔法が未熟だということになるんだよ。」
普段あんなにボケボケしてるのに魔法にはプライドがあるらしい。本当に意外だ・・・
「今失礼な事考えなかった？」
「おっと、しまった顔に出ていたようだ」
いやいや、そんな事ないよ。
「本音と逆になってない？」

「すまない、本当に意外だったんで混乱しているみたいだ」
「わたしだってたまには怒るんだよ？」
　このようなバカなやり取りをしているとノックが聞こえた。シルベイン様たちが帰ってきたようだ。扉を開けると楽しそうに笑っているウェルナ様とシルベイン様がいた。
「父さま！母様！先ほど初めて妖精を見ました！！」
　レティは走ってウェルナ様に抱きついた。
「おや？おそらくフィルの子供たちのことかな？」
　シルベイン様は妖精に心あたりがあるようだ。フィルという名前はどこかで聞いたことがある。シルベイン様の仲間であった方だろうか？
「ずいぶんと小さいと思っていたら子供だったんだ」
　レティが納得したように頷いている。
「ヒューご苦労様でした。レティの面倒を見るのは大変だったでしょう？」
　ウェルナ様が頭を撫でてくる。いつまでも子供扱いされているようで正直複雑な気分だ。
「いえいえ、いつものことで慣れてますから」
「今回もレティがどこかに行っちゃったでしょう？はぁ、本当に誰に似たんだか・・・」
　ウェルナ様がシルベイン様をジト目で見ている。
「ん？はっはっは、元気なのは良い事じゃないか！」
「「……はぁ」」
　ウェルナ様とおれは互いに目を合わせため息をつく。まあ今回は、レティは脱走したわけではなくはぐれてしまっただけだが。
「さて、もうだいぶ遅い。早く食事にしよう」
　シルベイン様が指を鳴らすと、メイドが部屋に食事を運んできた。
「……いつのまに用意していたんですか？メイドまで雇って……」
　ウェルナ様も知らなかったようだ。
「君があの後化粧を直しに行ってただろ？そのときメイドさんが歩

いてたから声をかけたら、話の流れでこうなった」
「……いろいろと言いたいことはありますが、とりあえず食事にしましょうか」

食事の内容であるが、とてつもなくおいしかった。王宮の料理と同程度かそれ以上であった。誰が作ったのか尋ねたらそのメイドが自分で作ったらしい。なんでもこの学園では料理の研究も行っていて、そこで日々研鑽しているらしい。ちなみにメイドの姿は趣味らしい。
「あの子、家に欲しいですね」
ウェルナ様がボソッとつぶやいた。
「ああ、後で声をかけてみるよ。そういえば言い忘れていたんだが、明日の夜、パーティーがある。それ　までは自由にしていていいけど、あまりお腹を膨らまさないようにね」
「パーティーですか？」
「まあ、久々に昔の仲間全員と会えたからそのお祝いをしようということになってね。他の仲間の子供も参加するからこれを機会に仲良くなっておくといいかもね」
つまり英雄たちとその子供たちでパーティーをやるらしい。おれも参加しなくてはならないのだろうか？どう考えても場違いだ。
「あの……おれも参加するんですか？」
「ん？当然じゃないか」
「当然・・・ですか？」
シルベイン様の顔を見るに、拒否権はないようだ。
「はい、わかりました……」
「ふぁ～あ、眠くなってきたしそろそろ寝ようか」
シルベイン様が欠伸をしている。とても眠そうだ。そろそろ自分の部屋に戻らなくては
「では、失礼します」
「一緒の部屋で寝ればいいのに～」

レティが残念そうに言う。いや従者が王族一家と一緒に寝るのはおかしいとおもうぞ？シルベイン様たちは気にしないかもしれないが。

レティに手を軽く振ってから部屋をでる……と泣いている女の子が目の前を通りすぎて行った。声をかけようとしたが……って速！！。あれはいったい何なのだろう。追いつけそうにないので、ほっておくことにした。それにしても今日は疲れた……すぐ隣の部屋に入るとベッドがあった。疲れていたのか、ベッドに倒れ込むとすぐに眠りに引き込まれてしまった。

散策開始

リオール学園中央校舎の中庭、朝靄の中で一人の男が剣を振るっている。

「ふう、今日はこのぐらいでいいだろ」

剣を鞘にしまい中央校舎に入る。学長やおれたちの客室のあるフロアほど宗教色の強い内装ではないが、どことなく神殿を思わせる作りをしている。中に入ると大広間出る。その大広間の入口の丁度反対側に大きな魔法陣がいくつも設置されていた。仕組みはよくわからないが中に入ると対になっている魔法陣に転送されるのだ。すぐそばに5と書かれている魔法陣に入る。すると魔法陣が発光したと思うと、目の前に扉が表れる。転送されたようだ。レティは初めて見たときはしゃいで遊んでいたが、おれにはどうも慣れない。魔法陣のある部屋を出て自分に用意された部屋に向かう。すると、龍のぬいぐるみを抱きかかえている女の子が歩いてくるのが見えた。昨日妖精と一緒にいた女の子だ。なにやらぬいぐるみに話しかけているように見える。レティ以外の女の子をあまりよく知っているわけではないが、少々不気味だ。

「あ、おはようございます。昨日はありがとうございました」

おれに気付き、挨拶をしてくれた。いつもレティと一緒にいるはずなのに、女の子に話しかけられると少し緊張するな。慌てて挨拶を返す。

「お、おはようございます。え～っと……」

そういえば名前を聞いていなかったな。

「私の名前はシルフィです。あなたはヒュージクリフさんですよね？」

珍しい名前だな……どこの国の出身だろうか？

「ふむ、こいつが先ほどおまえが話していた奴か」

ん？今ぬいぐるみがしゃべったのか？

「そういえばルークの奴が、剣が達者で面白いのがいると言っていたな」
本当にぬいぐるみが喋っているようだ。そしてなぜか偉そうだ……ルーク？えっと確かシルベイン様が魔王退治のときに名乗っていた偽名だったはずだ。ということは知り合いだろうか？……このぬいぐるみは一体なんなのだろうか？
「シルベイン様とお知り合いなのですか？」
女の子の抱きかかえているぬいぐるみに話しかける……おれは一体何をやっているのだろうか……。ぬいぐるみが質問に答えようとした瞬間、後ろからかなりの速さで走ってきた小さな女の子がぬいぐるみを奪っていった。
「レリオス～！！」
昨日廊下で泣いていた女の子のようだ。そのままぬいぐるみを抱いてどこかに消え去っていってしまった。
「あ……」
シルフィさんは茫然としている。
「大丈夫ですか？シルフィさん？」
「はい、大丈夫ですけど……大丈夫かしら？」
どっちだ？まあ、おそらくぬいぐるみの心配をしているんだろう。
「ところで、ちょっと質問なのですが年齢が近い者同士が話すときは敬語を使わないと聞いたことがあるのですが事実なのでしょうか？」
ずいぶん唐突な質問だな。でも俺もレティ以外で同い年の人と話したことがないからよくわからないな。一応そのことを聞いたことがあるから事実だと思う。
「伝聞でしか聞いたことがないけどおそらくそうだと思いますけど……。と場合にもよると思いますが」
「ああ、事実なのですね？」
手を叩いて笑顔になっている。人の事を言えないがこの子も結構な箱入りなのだろう。

「では、私たちも敬語をやめませんか？ヒュージクリフさん」
「ヒューでいいよ。よくわからないけど、それがおかしいならやめようか」
「ところであなたの彼女はどうしたんですか？」
「ぶ！？いや！！彼女じゃないから！」
「え？彼女じゃないの？」
「おれは・・・彼女の従者だよ」
「従者？やっぱり恋人ですよね？」
「なんでそうなるんだ？」
「だって、私の友達が恋人とは従者のことだって・・・」
「いくらおれでもそれはわかる。それはお前の友達がおかしい」
「え？そうですかね？」
「そうだよ」
「う～ん」
シルフィが深刻な顔で悩んでいる。いや、どこに悩むところがあるんだよ！！
「ところで、敬語取れてないぞ？」
「それが……重要なことに気付いてしまったのです……」
ん？なんだ？
「私はこの喋り方したことがないのです……あ、小さな子向けの喋り方はできますけどそれにします？」
「それってどんなの？」
「では失礼しますね……こんにちわぁ、今日はいい天気だね～」
「ごめん、やめて」
なんだか自分がすごく子供になってしまったように感じる。そういえば王宮のメイドの中に動物にこんな感じで喋りかけるのがいたなぁ。
「……では申し訳ないのですが私はこのままということで良いですか？」
「うん、それがいいと思う」

変わった子だな……
「ありがとうございます！あ、話は変わりますがもしこれから暇だったら学校見て回りませんか？もちろんあの子も一緒で」
「ああ、別に構わないが風呂入って朝食取ってからでいいか？」
「朝ごはんまだでしたか？急いでるわけではないのでゆっくりしてきてください」
「とりあえず時間と場所を決めておこうか、今から1時間後に魔法陣の部屋の前でいいか？」
「良いですよ。でも短くないですが？急がせていたら悪いと思うのですが・・・」
「風呂は練習でかいた汗を流すだけだからそんなに時間はかからないからな」
「ヒューが良いのでしたら、それでお願いします？」
「じゃあ、また後で」
互いに手を振って別れた。そして自分の部屋に戻りベッドに腰を掛けると
「うぎゅ」
変な声がした。布団を捲るとレティがいた。
「何でおれの部屋で寝てるんだ？」
「あ、おはよー」
「いや、おはようじゃなくて」
レティは目を擦りながら起き上る。
「朝ごはん一緒に食べようと思ったんだけど、目の前に暖かそうなお布団があったら寝るしかないじゃない？」
「同意を求められても困るんだが……」
思わずため息が出た。
「朝食はとりあえずおれが風呂をあがってからでいいか？」
「いいよー」
この部屋には脱衣所と小型の浴槽が付いている。脱衣で服を脱ぎ汗を流した後、浴槽に入る。やっぱり練習の後の風呂は気持ちいい

な～。と思い脱衣所の扉を開けると……閉める。
「おい何でそこにお前がいるんだ？」
「え？わたしもお風呂に入ろうかなって……」
「おれが入ってること知っているだろうが」
「別に今さら恥ずかしがることじゃないと思うよ？昔はよく一緒に入っていのに」
「いつの話をしているんだよ！！とりあえず服を着ろ！！」
「うん、わかった」
そう言うと服を着ている音が聞こえた。
「よし、そして扉をあけ・・・おっと、浴室じゃないぞ」
「え～。あ……うん、出たよ～」
「おい、今のえ～は何だ？」
「何でもないよ～」
まあ、レティの奇行はいつもの事だから考えてもしょうがない。とりあえず体を拭き、服を着る。外に出るとレティがふて腐れている。
「ん？どうした？」
「……はい」
パンを投げてきた。それを受け取り食べてみる。なかなかおいしいな。
「あれ、風呂には入らないのか？」
「うん、そんな気分じゃなくなっちゃったや」
どうしたんだろう、いつになく不機嫌だ。
「あ、そういえば昨日会った女の子覚えてるか？」
「うん、ミリィちゃんと一緒にいた子だよね？」
「その子に一緒に学園内を散歩しないかって誘われたんだ。レティも一緒にって」
「うん、別にいいよ。ミリィちゃんも来るのかな？」
「さぁ？たぶん来るんじゃないか？」

他愛もない会話をしながら朝食を食べ終え、待ち合わせの場所へと行く。するとシルフィが待っていた。両肩に乗せた二人の妖精とおしゃべりをしている。こちらに気付き手を振ってくる。近づいていき初めて話すものもいるので再び自己紹介を行い、魔法陣で下の階に行き校舎を出る。
「これから行く場所は決めているのか？」
「えっと、魔法系のところを回ってみたいなって思っているのですが、良いですか？」
「わたしも魔法系回って見たかったんだ～」
レティが同意する。
「二人とも行きたいなら良いけど、どこにあるんだ？」
「本当はアレーヌさんに案内お願いしたかったんですけど……急に用事ができてしまったようで」
「つまりわからないってことか」
「はい、そうなりますね」
「よし、あっちへ行こう！」
「「行こう～！！」」
妖精たちと遊んでいたレティが歩き出す。
「おい、道知ってるのかよ？」
「知らないよ？でも途中で会った人に聞けばいいじゃない？」
「まあ、それもそうか」
こうしておれ達は学園の散策を開始した。

「で？ソフィ？我に見せるものとはなんだ？」
「それがさあ……わたしの部下の一人が召喚術を研究しているんだよ」
「ふむ……」
「そいつは何を思ったのか無機質の物質を召喚できないかって考えて、今朝、石の召喚に挑戦したらしいんだ」
召喚は基本的に幻獣などの生物を呼ぶものである。魔剣など、例

外的に召喚できる物もあるが基本的に意思のない物は召喚できないとされている。
「失敗して何か危険な物でも呼んだのか？」
「う～ん、それが危険かどうかいまいちわからないんだけどね。まあ見てもらった方早いと思うよ……着いたよ～」
　目の前には何の変哲もない石造りの建物がある。話によると研究用の建物らしい。中に入ると大量の本棚や魔法陣の書かれた紙、召喚用の触媒などが散乱していた。召喚には触媒は必ずしも必要なわけではないが、召喚する者にちなんだ物を触媒に使うと召喚の成功率が格段にあがるのだ。
「えっと、召喚されたのはこれなんだよ」
　目に前には何もない。いや、ソフィの指は地下へと続く階段を指している。
「地下に何かあるのか？」
「何かはあると思うんだけど……そもそもこの建物に地下なんてないんだよ」
「つまり……この階段が召喚されたものだと？」
「そうみたいなんだよね……こういった魔法って何か心当たりある？」
「いや……ないな」
「だよね……それと一番の問題は別の場所にも階段が表れたりしているみたいなんだ。一応アレーヌとかに頼んで階段を見つけて封鎖するよう頼んであるんだけどね」
「つまりどこかの遺跡か、下手をしたらダンジョンを召喚してしまった可能性があるわけか」
「まあ地下に召喚されただけラッキーだとは思うけどね。うん、これを研究すればすごい事が出来そうな　気がするね。こんなにすごい失敗をするなんてさすがわたしの弟子だよね」
「ああ、お前に似てとてもはた迷惑な奴だろうな」
「もーレリオス。ずっとぬいぐるみのままにしちゃうよ？」

「この魔法、無理やりにも解いてしまうぞ？」」
「どうせやらないくせに～」
頭を撫でてくる。若干腹が立つ。
「ちょ、ごめん！火吹くのだけはやめて！！本当に熱いから！！」
「中を調べるんだろ？早く戻せ」
「わかったから！止めて！」
体が膨らみ、赤髪で褐色の肌をもつ人間の姿になる。
「よし、いくか」
「どうすればレリオスの炎を防げるのかな……水の膜を張っても貫通てくるし、もしかして火じゃないのかなぁ」
なにやらぶつぶつ言いながらついてくる。
「中には何があるかわからんのだぞ。気を引き締めろ」
「わかってるってば。久々の冒険だよ。ワクワクするね」
本当にわかっているのだろうか？まあ、こいつの心配などする必要はないか。
二人は薄暗い階段を下りて行った。

学園見学のはずが・・・

斧を持った頑強な男が斧を振り下ろしてくる。斬撃を剣の腹で横に流す。斧は床に深く突き刺さり抜けなくなる。すると、男は斧を離し後ろに下がる。そして、前かがみになり思いっ切り突っ込んできた。目の前に角がせまる。そう、この男は人ではなく牛の頭をしている。ミノタウロスという魔物だ。突進を紙一重で避け、後ろから剣を突き刺す。すると、その巨体は崩れ落ち、塵となって消えていく。少し離れたところから拍手が聞こえる。

「うわぁ、さすがヒュー！強いね～」

レティが呑気にそんなことをのたまう。正直あの突進は死ぬかと思った。今でも心臓の鼓動がおさまらない。そもそもどうしておれはこんな化け物と戦わなくてはならなくなったのだろうか？　これまでの行動を思い返してみる――

「とりあえずあの大きな塔に向かえば誰かに会えるよね？」

ここから正面に一つ、左右に一つずつかなり巨大な塔が見える。

「そうだな、とりあえず正面の塔に向かってみるか。いいよな？」

「はい、それでいいと思います。上から見たときはわかりませんでしたが、小さな塔がたくさんあるんですね～」

この学園は大きな塔を囲むように大量の小さな塔が建てられている。この塔のほとんどが魔法で作られた材料によって建てられているらしい。

「ああ、おれ達も来たばかりでよくわからないんだけど、戦士系の塔は武器どころか流派ごとに建ってたりするらしいぞ」

「それってこの学園に収まりきらないのではないでしょうか？」

「ああ、だからこの学園には地下があって、そこにも塔がたくさん経っているんだってさ」

「もしかしてあの階段がそうなのですか？」

「あれ？魔法陣で出入りすると聞いたような気がするんだが……階段もあるのか」
「とりあえず入ってみようよ。わたしも話でしか聞いてないから楽しみなんだぁ」
レティが駆けて行く。
「キャーーー！！」
「どうした！大丈夫か！」
「大丈夫ですか！？」
二人で急いで階段を降りていく。すると……階段の下で逆さまになって、涙目になっているレティがいた。
「痛い……」
どうやら階段で転んでしまったようだ。
「……大丈夫か？」
「うん……なんとか……」
「わぁ痛そう……」
赤いリボンの妖精レミィがレティの擦りむいた膝を見てそう呟く。そして青いリボンをした妖精ミリィと顔を合わせ頷きあうとレティの膝に手をかざす。すると妖精姉妹の手から暖かな光があふれ、傷口がふさがっていく。
「わぁ、すごい！君たちこんなことできるんだ！！」
レティがそう言うと、嬉しそうにレティの周りをくるくると回りだした。そういえば妖精族は魔法が得意であると聞いたことがある。ふと、あたりを見回してみる。石作りの長い回廊のようだ。奥は見えないが暗くはない。天井がうっすらと光を放っているようだ。
「もう大丈夫か？」
「うん、君たちは本当にすごいね。ありがと～」
妖精たちの頭を撫でている。
「よし、じゃあそろそろ行こう！」
そういうとレティは立ち上がり、再び歩き出す。まったく懲りてないように見える。シルフィだって呆れるだろうに……シルフィは

クスクスと笑っていた。おれの視線に気づくと目を拭った。そんなに可笑しかったのだろうか？
「あ、すみません。先ほどのあなたの心配そうな顔が父と重なってしまいまして」
どうやら笑われていたのはおれの方らしい。
「それにしても不思議な感じのする場所ですね」
「ん？不思議って？」
「うまくは言えないんですが……精霊さん達の住む場所に近い雰囲気があります」
「ん？精霊って普通人前に出ないんだろ？それに自分の縄張りの近くには絶対に人を近づけないと聞いてるんだが？」
「え？そうなのですか？」
「え？違うのか？」
「森の精霊さん達が特別なのかな？よく一緒に遊んでましたけど……」
あれ？　おれの知識が間違っていたのか？
「まあ、いいや。早く行かないとレティにおいてかれる」
少し急ぎ足でレティを追いかける。

「これっていったいどこまで続いてるんだ？」
だいぶ歩いたと思うが全然先が見えてこない。
「はあ、結構長いね～」
レティが壁に寄り掛かる。すると壁の一部がへこみ、カチッという音がした。と同時に体を浮遊感が襲った。
――そして二時間ほどさまよい続け、今にいたると。なんだここは？どうしてこんな場所が学園にあるんだよ！？訓練用か？もしそうだとしてもあんなところに入口があるのはおかしいだろ！妖精姉妹とは、はぐれてしまったし、化け物だらけでいったいどうすれば良いんだよ！

「おや？あれって扉ですよね？」
シルフィが指の先には遠くて薄らとしか見えないが扉があった。
「やった！出られるかも！」
レティが走り出す。
「おい！こら！何があるかわからないんだから走るな！！」
レティは扉の所までたどり着いた。ふう、何もなかったようだ……
「ってこら！そこで待ってろ！！扉を開けるな！！」
静止を聞かずに扉の中に入って行ってしまった。急いで後を追い扉の前に来る。扉は銀色で宝石が散りばめられた、豪奢な作りになっている。中に入ると、大きな広間に出た。見回すと、こちらの反対側にも今入ってきた扉と同様の装飾が施された扉がある。そして左側の奥には色は金だが同様の装飾がされた扉がある。その扉の両端には二体の巨大な石像がある。その大きさは人間の大人三人分くらいあり、それぞれ巨大な大剣を携えている。
レティは部屋に入ったところでおれ達を待っていたようだ。そして石像を指さす。
「あの石像って、どう考えても動きそうだよね」
「ああ、もし運が悪ければ扉を開けた瞬間に襲い掛かっていたかもな」
「そんなに睨まないでよ。これでもちゃんと動き出したら逃げる用意位していたんだよ」
「もし逃げられなかったどうするつもりだったんだよ」
「そのときはそのときで……」
「はぁ……」
おれは思わずため息をついた。
「あの……大丈夫ですか？……」
後ろから声がした。見ると恐る恐ると言った感じで扉を開けるシルフィの姿があった。急ぎすぎて置いて来てしまったようだ。
「あ……ごめん……」
「あ、いえいえ。皆さんが無事でよかったです」

シルフィは安心したように笑う
「はぁ……おまえも少しは見習ってほしいよ」
「む……ひどいなぁ」
「こんなことやってる場合じゃないな、どっちに行こうか？」
「とりあえず正面の扉を開けてみませんか？金の扉はちょっと・・・・」
「あの石像かなり怪しいよな。じゃあそうするか」
正面の扉のところまで行き、扉を開けようとする・・・
「あれ？」
「ん？どうしたの？」
「開かない……」
「へ？」
「え？」
「というか取っ手がない」
慌てて入ってきた扉も確認する。
「こっちないぞ！」
どうやら閉じ込められてしまったようだ。
「ということはあの金の扉しかないってことだよね？」
「ああ、そうなるな」
「とりあえず、二人はここで待っていてくれ。おれが先に近づいてみる」
剣を抜き、石像の傍まで近づいていく。
『我らを倒せ、さすれば汝の求めるものを与えん。これが最後の試練なり』
部屋に声が響き渡る。求めるもの？なんだ、それは？とりあえずこいつらを倒せば最後らしい。近づいて見るとやっぱりでかいなぁ。片方の石像が動き出す。その手に持っている大剣を大きく振りかぶる。思っていたよりもスムーズだ。そして、その大剣が振り下ろさ

れる。
「はや！！」
横に跳んで回避する。そして懐に潜り込もうとしたとき、もう片方の石像が動き出し剣を目の前に突き刺してくる。慌てて後ろに跳ぶ。
「ちょっと待て！こんなのと二体一とか無理だろ！」
必死に剣を回避していると突然床から木が生えて、一体の石像に巻きついて動きを封じ込めた。後ろを見ると、シルフィが何かいろいろな物が付いている鎖を手に持っている。その横には体に蔦を巻きつけた緑色の髪を持った女の人がいた。
「前！前！」
レティが叫ぶ。ふと、前を見るともう一体の石像が大剣を振りかぶっていた。振り下ろされる大剣を横に回避し、今度こそ懐に入る。そして足を思いっ切り斜めに切る。石像は切られた足を残して倒れる。倒れた石像の頭の方に近づき、剣を突き刺すと石像は足先から塵となっていく。ふと、後ろから木々を引きちぎる音が聞こえた。後ろを向くと石像が剣を今にも振り下そうとしている。剣を抜き横に跳ぼうとする……が、剣が抜けなかった。
「まずい！」
剣を離せば良かったのに完全に油断していた。剣が目の前に迫ってくる。頭が真っ白になっていた。　あ……おれ、ここで死ぬのか……

角

「ねぇ、レリオス。なんだか揺れてない？」
確かに先ほどから振動を感じる。まさか、また罠が発動したのではあるまいな？
「なにか触ってないだろうな？」
「ん？特に触ってないと思うよ。こんなとき、レイナがいると助かるよね。せめてルークでも居てくれればな～」
「ない物ねだりしていても仕方なかろう。一応警戒しておけ」
まあ、先ほどからたいしたことのない罠しかないので心配の必要はないだろう。
「あ、なにか踏んじゃった……」
横の壁から大量の槍が付き出てくる。
「それにしても中々奥が見えてこないね。」
槍がソフィの体に触れると同時にへし折れていく。
「ふむ、遠くに扉が見えるぞ」
「お？本当だ！あれが最深部だったらいいなぁ」
扉に近づくほど振動が強くなっていく。そして扉の奥からなにか音が聞こえる。
「この部屋にこの振動の原因になるものがあるみたいだね」
扉を開けると巨像が体に巻きついた木々を引きちぎり大剣を振り下しているのが目に入った。そしてその大剣の振り下される先には今朝会った男がいた。
「あいつは何をやっておるのだ！」
大剣の動きを封じるために前に出……ようとしたが……
「ん？」
突然、巨像が動きを止めたのだ。そして石像に複数の切れ込みが表れ、粉粉に砕け散った。
「なんだこれは？」

巨像の動きが止まる前に膨大な魔力を感じた。そしてその魔力の元を見るとシルフィと一人の少女がいた。そしてその少女の頭には二本の角が生えていた。それは、昔に見たある人物の頭に生えている物に限りなく似ていた。
「あれは魔王の角ではないか……」

目前に迫る大剣ごと石像がバラバラになった。
「あ、おれ、生きてる？」
なにが起きたんだ？　シルフィがやってくれたのか？　礼を言おうとシルフィの方を見るが、シルフィは驚いた顔をして横を向いている。ん？なにがあったんだ？視線の先を見ると、そこには目を虚ろにしたレティがいた。なぜか頭には二本の角を生やしている。あれ？　昔どこかでみたような……。ふと嫌な予感がしてその場を離れる。すると、今まで巨像がいた場所の床が何か鋭い刃物で切り付けられたように抉れていく。そしてその範囲は徐々に広がっていく。
「な！？おい！レティやめろ！！」
そうだ、思い出した。かなり小さい時にこいつに助けられたことがある。急いでレティの側に駆け寄る。
「おい！しっかりしろ！！おれはもう大丈夫だ！！」
助けられたが、その時周囲の森は広範囲に渡って木々が倒され、荒野のような状態になってしまったのだ。
「あ、ヒュー……よかった……」
目に光が戻り、気絶する。いや、眠ったようだ。規則的な寝息が聞こえてくる。
「ありがとな、レティ。それとシルフィもありがとう。ところで、あれって召喚術だよな？」
「え～っと、実は私もよくわからないんですけど、こちらに来るときにみんなからこれを渡されまして」
そう言っていろいろな物を結びつけた鎖の輪を見せる。動物の牙や角、葉っぱなど様々な物が紐で結びつけられている。

「さびしくなったり危なくなったら、これを持って名前を呼んでくれって言われたんです」
そういえばそんな召喚術があると聞いたことがある。たしか契約召喚だっけ？　精霊や幻獣から縁の物を借りて、それを使って召喚するのだったと思う。
「すごいな、おれも魔法覚えたいなぁ」
「みんなに力を貸してもらっているだけですから、私の力というわけじゃ……あれ？お父様？」
おれたちが入ってきた扉と反対側の扉の所にソフィ様と見知らぬ男がいた。この男はどうやらシルフィの父のようだ。二人は何か話し合っていたがおれたちの視線に気づくと、こっちに歩いてきた。
「なぜここにいる？」
「えっと迷子……ですよね？」
いや、おれに振られても……
「まあ、一応そんなところです」
「言いたいことはいろいろあるが……まあ、無事でなによりだ。この奥を調べたら一度地上に戻るか。おい、ソフィ行くぞ。お前らは後からついてこい」
「は、はい」
あれ？なんかこの声と喋り方をどこかで来た気が……
シルフィの父が金の扉を開け、ソフィ様と一緒に部屋に入っていく。おれ達も部屋に入る。すると、金の壁に宝石などが散りばめられた、正直な感想を言うと悪趣味な部屋に出た。そしてその部屋の真ん中に細身の剣が台座に突き刺さっている。一見すると普通のどこにでもあるような剣だが、かなりの業物であることがわかる。
「ふふふ、よくぞここまできた。とりあえず褒めてつかわそう」
どこからか随分と偉そうな、女の声が聞こえた。
「経験不足であるがまあ良いじゃろう。おいそこの小童、お前さんの物になってやろう。ありがたく思え」
ん？　どうやらおれに言っているようだ。何処から声がしている

のかわからないが、言っている意味も分からない。とりあえず声の主を探すため、あたりを見回す。
「こっちじゃ！あああもう、これで良いか？」
剣の周りに靄が立ち込めると、その靄が集まり人の形を成し、１人の少女となった。歳はおれと同じかそれよりも低いように見える。
「えっと・・・精霊？」
「そうじゃ、わらわはこの剣の精霊じゃ。そしてこの迷宮でわらわを持つに相応しい者を待っておったのじゃ。まだまだ腕は十分とは言えないがまだ若いし、将来に期待してお前さんを主として選んでやろうというのだ。ありがたく思え」
確かにあの剣はかなりの業物で、もらえるならありがたいと思うが……こんなのがついてくるのか……
「おい、お前さん今失礼なことを考えなかったかや？」
「いや、綺麗な剣だと思っただけだ」
「そうじゃろう！この美しさがわかるとはやはりわらわの目には狂いはなかった！」
「はあ・・・」
「もういい加減ここにいるのも飽きたから、正直誰でもよかったのだがわらわは本当に運がいい」
「おい、“わらわの目に狂いはなかった”って言ってなかったか？」
「この中で最も剣の扱いがマシな奴を選んだではないか。そんな事より早く抜くがよい」
精霊が随分と嬉しそうにしている。やっぱりおれの物にしなくちゃいけないのか……。シルフィを床に寝かせ、剣に手を掛け、引く。すると、思っていたより簡単に剣が抜けた。剣は羽のように軽く、握り心地は手に吸い付くようだ。一介の剣士として、これほどの剣を手に入れた喜びを抑えられない。
「おお、すごいな」
「ふふふ、これから世話になるぞ。わらわはルミエル。主の名は？」
「ヒュージクリフだ」

「ふむ、長いな・・・ヒューと呼ばせてもらうぞ？」
「ああ、周りからはそう呼ばれているし、別に構わないが……」
「では迷宮を閉じるとするかの」
ルミエルがそういうと周りの景色が歪み、いつの間にかおれ達が入ってきた大きな通りに転送されていた。
「ん？何処じゃここは？わらわは山奥に迷宮を作っていたはずじゃが……」
「ああ、それなんだけど……」

ソフィ様曰く、この迷宮はソフィ様の弟子によってこの学園に召喚されてしまったようだ。
「ほう！この迷宮はわらわの体のようなものじゃからな。召喚は可能であろうが、これほど巨大な物を召喚してしまうとは……ここには面白い奴がたくさんいるようじゃのお。ああ、久々の外じゃ！あちこち見て回りたい！ヒューよ、案内せい」
「案内しろって……おれもまだここの事知らないし、これから用事もあるから明日でいいか？レティも連れて行かないといけないしな」
レティを抱きかかえて持ち上げる。
「ふむ、まあ数百年も待っておったのじゃ。一日くらい構わんぞ」
数百年って……この剣は一体何年前に作られたんだろう？
「そういえばあの子たちは大丈夫なのかしら」
シルフィが心配そうに言う。
「あの子？……あ、レミィとミリィか！！今どこにいるんだ！？」
辺りにいないか探してみるが、見つからない……。が、遠くから誰かの声が聞こえてきた。
「お～い！大丈夫かい？」
聞いたことのない声だ
「大丈夫ですよ～」
シルフィが答える。どうやら知り合いのようだ。声のした方を見ると、三人の妖精がいた。二人はレミィとミリィでもう一人は姉妹

よりもいくらか大きい妖精だった。父親か？
「ああ、良かった。レミィとミリィが、突然泣きながら飛びついてきたものだから本当にびっくりしたよ。おや？もしかしてヒュー君とレティちゃんかな？大きくなったねぇ」
おや？昔のおれ達を知っているようだ。
「まあ、とりあえずみんな疲れてるだろうし、ここは解散して夜のパーティで話をしようじゃないか」
正直だいぶ疲れていたようだ……気が抜けたら……眠く……
……おい……ソフィ……そいつら……我……背中に……がよい
そんな声を最後におれは意識を失った。

エピローグ

「本当に死ぬかと思ったよな」
シルベイン様の仲間たちで開かれたパーティーにはおれ達だけでなく、シルフィと妖精姉妹も招かれていた。ある程度予想はしていたが、やはりシルフィ達もシルベイン様の仲間の子供であるらしい。
「あの時は本当に心臓が止まるかと思いました」
青のドレスに身を包んだシルフィが頷く。
「本当だよ！！……はぁ～気絶しちゃうなんて、わたしったら情けないなぁ」
白いドレスに身を包んだレティがため息をつく。レティはあの時のことを覚えていないらしい。あの後ソフィ様が魔法をかけて角を消してしまった。ソフィ様にレティについて聞いたが教えてくれなかった。いろいろと気になりはするが……まあ、全員無事だったから良しとしよう。
「まあ、あれにやれても死なないのじゃがな」
腰に差している剣から声が聞こえる。
「へ？」
レミエルが姿を現す。なぜか赤いドレスを着ている。
「あれは幻のようなものじゃよ。死体が残らなかったじゃろ？実態のあるものを作るのは骨が折れるし、そもそもわらわは無駄な殺生は好かん」
「ああ、そうなのか……怯えて損したな……」
あの時は冗談抜きで死を覚悟した。今でも思い出すと体が震える。
「じゃがな、主のように甘い考えだと長くは生きられんぞ？二体いることがわかっているのに、一体倒しておれはやったぞ！！って顔していた時は思わず吹き出しそうになったわい」
「……そんな顔はしていない」
だが気を抜いたのは確かだから返す言葉もない。

「その辺のことは経験不足から来るのであろうから、いずれ直るじゃろ……死ななければじゃがな。ワハハハハハ」
と言って笑っている。不吉な事言いやがって……。
「お？あれは何じゃ？うまそうじゃな」
ルミエルは他の机の上のに盛られている食べ物に釣られてどこかに行ってしまった。身内だけの小さなパーティーと言っていたが・・・城で行われているような立食パーティを、人数に合わせて小さくしただけで、かなり豪勢な食事が山ほどある。
「どうです？楽しんでいますか？何か不備がありましたら遠慮なく言ってくださいね」
シルベイン様たちと何か話していたアレク様がおれ達に気付いて声をかけてくれた。
「料理もおいしいですし、とても楽しませて頂いています」
「ところで、その剣を少し見せてもらうことはできますか？」
「はい、別に構いませんけど……」
腰に差していた剣を渡すと、少しの間何かを考える表情をした後、すぐに剣を返してくれた。
「ありがとうございました。後で調べてみようと思いまして」
「やはりこういった物は珍しいのですか？」
「そうですね、珍しいと言えば珍しいのですが、意外とその辺に転がっていることもあります。しかし認めた使い手でないと普通の剣として振る舞うので、それが魔剣だと気付かないことが殆どですね。ただ、魔剣が迷宮を作り出すというのはそれなりに珍しいですから、やはり学園の長をする者として興味は惹かれますね……おや？レリオスが呼んでいるので失礼しますね」
そう言うと今日迷宮で会ったシルフィの父の方へ向かっていった。先ほどシルフィから今朝のぬいぐるみと同人物らしい。いや、そもそも龍族らしいので同龍物……などと下らないことを考えているとレティが話しかけてきた。
「ヒュー。何難しい顔しているの？ほら、これすごくおいしんだ

よ！食べてみてよ！」
「ん、確かに美味いな……ところでお前あれから特にどこか悪いところとかないか？」
角が生えたりよくわからない魔法を使ったりしていたから、体に異常が出るんじゃないかと心配で聞いてみた。
「ん？別にないよ？逆にお昼寝……って言っていいのかわからないけど、ゆっくり寝たから逆に調子が良いぐらいだよ」
「そっか、ならよかった」
「あ、そういえばもうすぐ楽団の人が演奏を始めるんだって。その時一緒に踊らない？」
「……おれが踊り下手な事知ってるだろ？」
「ゆっくり踊るからわたしに合わせて動けば大丈夫だって。・・・・それともわたしと踊るのが嫌なの？」
かなり残念そうにして、顔を覗き込んでくる。
「……少しだけだぞ」
「やった～！！」
嬉しそうに手を叩いて飛び跳ねる。いくら身内だけとはいえよく知らない人もいるし、踊るのは恥ずかしい。正直、かなり後悔している。
「はぁ……」
ため息をついていると金属でできた筒や木で作ったられた物に紐などを張った楽器を持った集団が出てきた。
「ほら、ヒュー行くよ！！」
レティに手を取られて部屋の真ん中に連れ出される。は！？　ここで踊るのか！？
「おい！？もっと部屋の端とかでおどらないか？」
「ほら！もう曲が始まるよ！！」
会場にゆったりとした綺麗な音が流れる。それに合わせてレティが上下左右にゆっくり動く。大きくゆっくり動いてくれるので、おれでもなんとかついて行くことができる。

「ふふ、ヒューと踊るのなんて本当に何年ぶりだろうね」
なんだかすごく嬉しそうだ。その顔を見ていると顔が熱くなってきた。
「さあな……」
「あれ？顔が赤いけど大丈夫？」
「ここで踊るのが恥ずかしいだけだ……」
ふと、周りを見ると妖精姉妹とシルフィがじゃれる様に踊っていたり、シルフィの父とソフィ様など気付くと全員が踊っていた。
「ほら、よそ見しないで。音楽が変わるよ」
「わ！それは早いって！？」
足を縺れさせながらもなんとかついていく。レティはいつも楽しそうにしているが、今日は特に楽しそうだ。こんなに喜んでくれるのならダンスに付き合った甲斐があったのかな？……もう少しダンスの練習を普段からしておくか。

エピローグ（後書き）

まずはここまで読んで下さった方々に心からの感謝を、ありがとうございます！！

一応ここまでで一話ってことになるのですが……

うん……この話っておもしろいのかなぁ？読み返してみるとあちこち削った方が良いところや変な文章みたいなところや直したいところがボロボロと……一応これが初めて書いた小説？になるのですが本当に話を書くのって難しいですね。細々と続きは書いていく予定ですが、いろいろ書き直したり、これから少し忙しくなったりもするのでかなりペースは落ちていくと思います。

あと練習のために短編とか書いてみたりすると思うので、もし良かったらこの話共々アドバイスや感想など頂けたら嬉しいなぁと思います。

では、お目汚し失礼しました！！

入学式

「リオール学園へようこそ。私は学長のアレクです。あなた方を心から歓迎します。我々はあなた方がさまざまな事を学び、深い知識とすばらしい技術を身に着られるように願い、そしてその手助けできるように最大限に努力をします。あなた方は・・・」

壇上で学長が新入生へ向けて演説を行っている。迷宮の騒動から一ヶ月、何も起こらず平穏に……とはいかなかったが、まあ無事に入学式を迎えることができた。ははは……良く生きてたよおれ。自分で自分を褒めてやりたいくらいだ……

「ん、どうしたの？」

横にいるレティが心配そうに聞いてくる。

「いや、なんでもない……あ」

急に壇上が爆発を起こした。それにより学長が壇の下に吹き飛ばされたが服には汚れ一つ付いておらず、いつもの様にため息をついている。

「こんな長ったらしい挨拶はもう終わりにして先生の紹介を行うよ！！まぁ全員紹介すると何日も掛かっちゃうから主に君たちを教える人たちだけだけどね！！」

爆発によって発生した煙が晴れると、壇上にはトンガリ帽に黒のローブといった典型的な魔法使いの格好をした女の子がいた。そして手には龍のぬいぐるみを持っている。ソフィ先生だ。

「うわぁ、相変わらず無茶苦茶だね～」

レティが楽しそうに笑っている。おれもだいぶ慣れたが本当に滅茶苦茶だと思う。

「じゃあ始めるよ！！わたしはソフィ＝エルラント。見た目でわかると思うけど魔法を教えるよ。歳はひ・み・つ。……わたしは子供じゃないよ、そこの君？」

当然ながらおれらと違い、普通の人達はざわついている。ちらほ

らと「子供だ」とか聞こえていたが、ソフィ先生の一睨みで静かになった。静かになったのは先生の睨みが怖いのではなくて、今にも泣きそうな顔だったからだろう。目を擦り、いつも通りの笑顔に戻るとぬいぐるみにマイクを向けた。

「そしてこの子はレリオスだよ。ほら、自己紹介して」

「この子とはなんだ。我はレリオス。魔法の授業の補佐と、歴史や博物について教える」

あちこちから「ぬいぐるみが喋ってる？」とか「かわいい～」と聞こえてくる。この光景にそれほど違和感を感じなくなっているおれはおかしいのだろうか？・・・おかしいんだろなぁ。

「レリオスそれで終わり？味気ないなぁ。まあいいか。それじゃあわたし達はこれで。」

再び壇上が爆発した。煙が晴れるとそこにはもう誰もいなかった。

「わぁ、すごい！！パチパチ」

レティは呑気に拍手をしている。

「う～ん、手品みたいになっちゃいましたね」

シルフィがそう呟いた。

「ん？」

「先生に面白い登場の仕方を聞かれたので、爆発すればいいんじゃないでしょうか？と言ったのですが……どうです？」

思わぬところに黒幕がいた……。なんでそう聞かれて、爆発って言葉が出てくるんだよ・・・

「どうです？と言われてもな……まあ、インパクトはあったと思う。ほら、みんな驚いてるし」

「う～ん、上々と言ったところでしょうか？」

だからおれに聞かれても困るんだって……。ソフィ先生達が消えた後、他の先生方の自己紹介が始まった。他の先生方の自己紹介はごくごく平凡に……全長2メートルに及ぶワイバーンに乗って窓から飛び込んできたのや、壁を細切れに切り裂いて入ってきたりしたのがいたような気がするが、まあ平凡に終わった。ソフィ先生がま

だおとなしい方だなんて事は一切なかった。
「先生たち、すごかったね～」
レティは先生方のパフォーマンス……じゃなくて自己紹介を目を輝かせながら見ていた。
「たしかにすごかったけど、さすがに自由すぎないか？」
「そお？楽しそうだとおもうけどなぁ。わたしもワイバーンに乗れるようになるのかな？」
「まあ、騎乗についても教えてくれるみたいだから、出来るようになるんじゃないか？」
そんな感じで話していると、再び学長が壇上に上りここでの生活の簡単なルールやこれからの予定について話してくれた。まずは身分や宗派および種族による差別や対立の禁止。おれ達の国では長年魔王の被害にあい続けていた影響のためか身分の堺がすごく曖昧だ。有能であれば騎士などに取り立てられて爵位を得たり、人手不足で貴族が農民を手伝ったりしている所なども存在する。だが他の国は貴族が他の人々を不当に虐げることが少なくないらしい。まあ、そういった貴族は自国の貴族のための学校に通うため、そういったことはまずないと聞いている。宗教間の対立は多少あるらしいが、おれ達には関係がないだろう。
次に他人への過度な詮索の禁止。多分これはレティのように特別な立場の人のためにある決まりだろう。レティ以外にもそういった人が結構いるのだろうか？長期休暇に先生方が直接赴いて、全員と面談しているらしいので一応信用はできるらしい。学園内でほとんど人を見かけなかった理由の一つだ。
最後に許可を得のない戦闘行為の禁止。血の気の多い生徒が良く乱闘騒ぎを引き起こしているらしい。この事について話す学長はすごく切実な表情をしていた。苦労してるんだなぁ・・・。許可を取れば、闘技場が設置されているらしいので、そこで腕を磨くために試合などを行えるらしい。他の細かい事は学生証に書いてあるらしいので後で見ておくように言われた。

「では、次にみなさんを教室に案内します。それぞれクラスごとの担当の先生の指示に従ってください」
おれ達はAクラスで担当の先生は……いつの間にか現れたソフィ先生がAと書かれた旗を持っている。そして当然のように龍のぬいぐるみを持っている。おれ達三人も同じクラスであることから、おそらく学長たちで決めたのだろう。おれは一応レティの護衛であるから、これは大変ありがたい。
「みんな～わたしについて来てねー」

「はぁ、我が教師とはな……しかも副担任とは……」
「一緒に頑張ろうね！わたしも担任になったのは初めてだからいっぱい迷惑かけるから」
「ところで、この学園の教師はあんなのばかりなのか？」
「ん？あんなのって？」
「壁や天井に穴を開けるような奴ばかりなのかと聞いている。我が聞き及ぶ教師像とはかけ離れているように感じるが？」
「う～ん……半々くらいかなぁ？それに普段は結構真面目な先生が多い……よ？」
「今の間はなんだ、それになぜ疑問形になっている」
この学園は本当に大丈夫なのだろうか・・・
「おっとそろそろアレクの話も終わるね」
そう言うと側にあったAと書かれた旗を持ち再び入学式が開かれている部屋に入る。
「みんな～わたしについてきてねー」
ソフィがそう叫ぶと生徒たちはこちらを振り向いた。不安そうな顔をしている者から楽しそうに笑っている者までいる。ソフィが歩き出すと全員ついてくる。そして入学式に使用された会場を出て中央校舎へと向かう。丁度中央校舎に入ろうとした時に後ろからズドンという大きな音が聞こえた。後ろを振り返ると会場がただの瓦礫の山となっていた。

「あ～あ、今年も持たなかったか～」
「毎年のことなのか……」
その光景に生徒たちの顔は青ざめていた。レティなどの一部の生徒を除いてだが・・・。
「うん、すでに行事みたいになっちゃってるね。建築の生徒や教師たちを中心にあの建物を作って、今みたいに破壊できるか勝負してるんだよね。一昨年に作る側で参加して建物の障壁を作ったんだけど、圧倒的すぎるから次からは参加しないように頼まれちゃったんだ・・・」
こいつの作る魔法障壁を普通の奴が破れるがないだろう。普通に力任せに破るなら山一つくらい消し飛ばす力が必要だ。
「圧倒的っていっても3人くらいは壁に傷つけてたのになぁ～」
「……」
人の事を言えないが、よくそんな化け物を3人も見つけてきたものだ……
「お、この教室だね。みんな席について。適当でいいからね～」
生徒たちが席に座る。人数は３０人ちょっとといったところか。
「入学式で自己紹介したから知っていると思うけど一応もう一度。わたしはこのクラスの担任になるソフィ＝エルラントだよ。そしてレリオスは副担任だよ。これからよろしくね。これからいろいろ細かい事説明するんだけど、その前に質問あるかな？」
すると生徒の何人かが手を挙げた。ソフィがその中の子から指名すると。
「先生は魔王を倒した英雄の１人と聞いているのですが、本当ですか？」
その生徒は目を輝かせながらソフィに質問した。
「ふふふ、その通り！魔法の事なら何でも質問してね」
生徒の中には、この事を知らない者もいたらしくざわつき始める。そして……
「そのぬいぐるみ、喋っていますけど使い魔ですか？」

「魔法見せてください！」
「頭なでていいですか？」
と生徒たちがソフィの元に集まって揉みくちゃにする。
「ちょっと待って！？一度に言われてもわからないから！！どさくさに紛れて頭なでるな！！」
そう言うとソフィは扉の所に魔法で転移した。
「ゼーゼー。ちょっと休憩にするから各自、友達でも作って置くように！」
そう言って我を抱えながら教室を抜ける。こんな調子で本当に大丈夫だろうか？かなり不安だが、ソフィがこのような目にあうとは……少し愉快な気持ちになるな。
「今笑わなかった？」
「いや、笑ってないぞ」
「絶対笑ったって」
「そんなことはない」
このようなやり取りを３０分ほど行ってから教室に戻ることになってしまった。我も何をやっているのだか……。

出会い

「やあ、初めまして。僕はルドラ＝サンクレイド。君はヒュー君だね？」

後ろの席の男が話しかけてきた。髪は茶色、細身だがひ弱な感じはせず無駄な肉が一切ついていない野生動物のような強さを感じさせる。そして頭には犬？の耳が付いている。獣人だ。動物などの耳やしっぽを持っているのが特徴の種族だ。人間と比べて身体能力などにかなりの個人差がある。魔王の側についていた者も少なくないので、一部の地域では迫害などが問題になっている。ところで、なんでおれの事を知っているんだ？

「そう怪しまないでくれよ。僕は学長の息子なんだ。母が獣人とのハーフだからこんな耳が付いてるけどね。僕はこの学園での生活が長いから少しは助けになる事が出来ると思うから、困ったことがあったら言ってくれよ」

そう言って手を差し出してくる。そういえば今は旅行に行っていて紹介できないが、息子も今年入学するからよろしくと言っていたな。この学園についてほとんど知らないので、側によく知っている人がいてくれるのはとても助かる。アレーヌさんも仕事が忙しいので、あまり迷惑を掛けるわけにはいかないしな。

「ああ、助かるよ。ヒューと呼んでくれ」

「よろしくヒュー。僕はルドラと呼んでくれ」

ルドラの差し出した手を握り、握手を交わす。

「そういえば、レティのことは？」

「ああ、そのことも知っているよ。シルベイン様にもよろしくって言われたよ」

ちなみにレティはシルフィとクラスの女の子たちで楽しそうに会話している。相変わらず適応力高いなぁ。おれの視線に気づくと手を振ってくる。それにおれが軽く手を振って返すと、レティの周り

の女の子がはしゃぐ。なんだ？
「あの子がレティだね？いやぁ、かわいいねぇ」
「中身は滅茶苦茶だけどな……どうした？」
ルドラは口元に手を当て、ニヤニヤしている。
「いや、話には聞いていたんだけど……仲がいいんだねぇ」
「ん？まあ小さい頃から一緒だったから仲は悪くないが？」
「あ～あ、僕も可愛い彼女がほしいなあ」
「ぶっ！！ゲホッ、ゲホッ！！」
いきなり何を言い出すんだこいつは！？　もしかしておれとレティがこ……こ、恋仲に見えたっ、たっ、たっていうのか！？
「おまえ、何か勘違いしてないか！？」
「へ？何もしてないと思うけど？」
「おれはあいつの従……」
ルドラはいきなりおれの口を手で塞いできた。そして小さく囁く。
「声が大きいって、身分は隠しておくんだろ？」
はぁ……おれは何をやっているんだろうか？　自分が情けなくなる。おれが落ち着いたのを感じるとルドラは手を離す。が、クラス全員から視線を感じる。あれだけ騒げばそりゃ目立つだろうが、えっと、こんな時どうすれば……
「みんな、騒いじゃってごめんね。ほら、君がレティちゃんの事が好きなのはわかったから、とりあえず落ち着こう」
「おい、おまえは何言ってるんだ！？そしてなぜみんな拍手してるんだよ！！レティも赤くなるな！！」
なぜかクラスの全員が拍手をしている。レティと話していた女の子たちなんてレティに尊敬の眼差しを向けている。そしてルドラはと言うと……腹を抱えて笑ってやがる。そのようにクラスが盛り上がっていると、ソフィ先生たちが入ってきた。
「みんな楽しそうにしてるところ悪いけど、静かにしなさ～い！！」
ソフィ先生がそう言うとクラスの生徒たちは騒ぐのをやめた。ああ、ソフィ先生が天使に見える……。

「それじゃあ、説明を始めるからね。クラスでやる授業は基本的に午前中で全部終わって、午後はそれぞれが学びたい事や、やりたい事に従事することができ……」

先生の話が終わり、レティ、シルフィ、ルドラ、おれの四人で寮へと向かう。本来は男子寮や女子寮などがあるらしいのだが、特別な事情があれば別の場所に住むことができるらしい。

「おい、なんてことしてくれたんだよ！？」

「だからごめんって。あの場を収めるのにあの方法しか思いつかなかったし、それに君たちが一緒に動きやすくなると思ったから。それにねぇ？シルフィちゃん」

「ええ、お二人の熱さに私はいつも熱中症で倒れてしまいそうになってますよ」

シルフィは額に手を当てて倒れそうになる振りをする。それをルドラが介抱するように支える……いつの間にこいつらはこんなに仲が良くなったんだ？

「全然反省していないだろ……。レティも何か言ってやってくれよ」

「え？なに？」

話を聞いてなかったようだ。おれ達の事なのに余裕だな……

「いや、ヒューの気持ちは嬉しいよ？だけど、みんなの前とかじゃなくてね。あの……もっと場所とか……」

訂正しよう。レティもかなり混乱しているみたいだ。

「あれはこいつの悪戯だ！別にお前の事をを話ていたわけじゃないし、なんだかおれが告白したみたいな流れにするのをやめてくれ」

そう言うとレティはすごく残念そうな顔をして項垂れる。なぜそこでがっかりするんだ？　そんなやり取りをしながら歩いていたら、一軒の建物の前に到着した。レンガ作りで赤い三角屋根、２階建ての普通の家だ。どうやらここがおれ達が生活する場所らしい。木製の扉を開き中に入ると、外観と比べてだいぶ豪華な作りになっていた。中央に階段があり、中ほどで二つに分かれて２階へ続いている。

そして一階と二階の左右には二つ、階段の両側にそれぞれ一つずつ扉がある。
「うわぁ、わたしたちここに住むんだぁ」
レティが感嘆の声を上げる。階段の左右の扉は中央に大きなテーブルがある、大広間につながっている。そして他の扉はそれぞれ、簡素なベッドと勉強机が一つずつある部屋に繋がっていた。大広間にも扉いくつかあり、洗面所や台所などに繋がっている。おれ達は大広間に集まり、これからの事を決めることにした。

話し合いは思っていたよりもスムーズに終わった。まあ、これからの事と言っても部屋割りをどうするか話しただけだからスムーズに終わらなければおかしいんだがな。
話し合いの結果、わざわざ二階を使う必要もないからみんなで一階を使い、朝早く起きて練習に行くおれは右側の玄関に近い部屋になった。他はみんなジャンケンで適当に決めた。おれを中心に時計回りにすると、ルドラ、シルフィ、レティである。話し合いが終わると。みんな疲れているだろう、ということで一旦解散になった。
「え～っと、これを床に置いて呪文を唱えればいいんだよな……」
おれ達が中央校舎の客室からこの家へ移る事になった時に、学長から一本のスクロールをもらった。このスクロールに武器や防具などを仕舞い込むことができる。欠点はこの学園内でしか使えないこと、中から出す物を選択することはできず全部出てきてしまうこと、それとおれには十分だが中にそれほど多くの物を入れられないことらしい。物を入れても重さが変わらないから本当に便利だ。魔法ってすごいなぁ……。ちなみにソフィ先生が開発した物らしく、引っ越しするときなどに使われているらしい。
教えてもらった呪文を唱えると中からおれの使っている防具や武器、その手入れのための道具や着替えなど生活に必要なものが出てきた。思わず「おお～」と感嘆の声をあげると。
「おお～、じゃないわ！このたわけが！！」

スクロールの中から出ててきた荷物の中から声がする。荷物の中の剣の一本から煙が出てきて、集まり、少女の姿となった。迷宮で手に入れた魔剣ルミエルだ。
「朝目が覚めて見たら周りは真っ暗、身動きはできん。なにごとかと思うて本当に、本当に……」
よく見ると目が赤くなっている。そんなに怖かったのか……悪い事したな。あと、精霊も泣いたら目が赤くなるんだ……
「悪かった。後でなにかおいしい物ご馳走してやるから泣くなって」
「わらわは泣いてなどおらぬわ！！」
そう言うと剣の中に戻ってしまった。あ、拗ねさせてしまった。
「ケーキで許してやる……」
「ん？」
「……」
その後何を話しても反応しなかった。ケーキか……ケーキってどこで買えるんだ？　後でルドラにでも聞いてみるか。とりあえず荷物の整理でもしようと思い荷物に手を掛けた瞬間。レティの悲鳴が聞こえた。
「レティ！！どうした！？」
急いで部屋を出て、レティの部屋へと向かう。ルミエルを構えて部屋を蹴り開けると、そこには……

大量の荷物による山があった。その山の中からくぐもった声が聞こえる。
「助けてぇ〜」
あまり入らないって……十分だろ。荷物の大半は服のようだ。女の子だから服が多いのはわかるが……さすがに多すぎだろ。他にも貝殻やら空き瓶などのガラクタなども混ざっている。そういった小物はせめて箱にしまうべきだろ……ってかこんなに大量の荷物どうしたんだ？　……そういえば数日前に荷物がいろいろと届いていたな。
とりあえずレティを助け出すために山を掘ると、すぐに足が見えた。その足を思いっ切り引っ張ると髪の毛をボサボサにしたレティが出てきた。
「ありがと〜」
「はぁ……こんなに持ってきてどうするんだよ」
「う〜ん、どうしよっか？」
おれに聞き返してどうする……。もう荷物の事は無視することにした。
「話は変わるけどさ、これから一緒に来ないか？」
「別にいいけど、どこか行くの？」
「ああ、こいつがケーキ食いたいんだってさ。とりあえずルドラたちも誘っておくから準備しといてくれるか？」
「ん、わかったよ〜」
ルドラに聞いたところ、意外と近くにあるらしい。シルフィにも声を掛けて、5人で行くことになった。二人とも荷物は少ないので準備がすぐに終わり、玄関のところでレティを待つことになった。
「おまたせ〜」

「お、来たね。じゃあ行こうか」
ルドラの話だと近くにおいしいケーキを出す喫茶店があるらしいので、そこに向かうことになった。
「ほら、あれがそうだよ」
五分ほど歩いたところでルドラが一軒の建物を指さした。ログハウス風の木造の建物だ。扉の上に木製の看板があり『海猫亭』と書かれている。それにしてもこの学園の建物は統一感がないなぁ。その横には東洋風の建物。正面には雑貨屋か？　大木をそのまま形を残してくり抜いてたような建物だ。
扉を開き中に入るとメイド服を着た女性が出迎えてくた。……メイドって喫茶店にいるもんだったか？　よく見るとそのメイドの顔には見覚えがあった。シルベイン様たちがまだ滞在していたときに、いろいろと食事の用意をしてくれた人だ。名前はサーシャで歳はおれ達よりも二つほど上だ。たしかメイド服は趣味とか言ってたな。よくわからない趣味だ……
「いらっしゃいませー。っておや？」
「どうも、この間はお世話になりました」
「いやいや、こっちも滅多にできないような経験ができて感謝してるよ」
この人の見た目は真面目そうなメイドだが意外とさばさばした性格で、喋り方もメイドというよりか酒屋の看板娘のようだ。
「ここに入学することにしたんだってね。おや？ルドラの坊ちゃんもいっしょか。久しぶりだね。旅は楽しかったかい？」
「久しぶり、楽しかったよ。やっぱり本で読んだ事と実際にこの目で見ることは全然違うね」
「そりゃ良かった。とりあえずこっちに座りな。注文は何にする？」
「ケーキじゃ！！ショートケーキが食べたいぞ」
いつの間にか剣の中から出てきていたルミエルが叫ぶ。
「はいＯＫ。他の人はどうする？」
全員ショートケーキを頼み、それぞれ紅茶やコーヒーなどを注文

した。注文を取るとサーシャさんは店の奥へと入っていたった。
「知り合いなのか？」
「僕も良くここに食べに来ているからね。サーシャさんはイベントとかの料理を担当したりすることもあって、すごい人なんだよ」
「確かにあの料理はすごかったな。レティの両親も欲しがってけど断られたんだよな……」
「堅苦しいのは苦手らしいし、ここにお店も持っちゃってるからね」
このお店はサーシャさんの物なのか。おれ達と二つしか違わないのにすごいな……
「はい、お待ちどう」
サーシャさんがケーキと飲み物を持ってきた。ケーキはスポンジに白いクリーム塗ってイチゴを一つ乗せただけの普通のショートケーキに見えるが、甘い匂いが食欲をそそる。コーヒーも香りが良く、すごくおいしそうだ。シルフィはケーキを食べたことがないらしく、恐る恐るケーキを口に運ぶ。
「うわぁ、これは本当においしいですね！！」
ルミエルは……もうすでに食べ終えておれの皿にフォークを伸ばしている。おれはそれを自分のフォークで阻止する。しかしルミエルは自分のフォークでおれのフォークを巻きつけるように絡み取って上空へ弾き飛ばした。こいつ剣のくせに武器の扱いが無駄に上手いんだよな……
「……」
「ちょっと貰うだけじゃ、いいじゃろう？」
「ちょっととか言いながら半分も持っていってんじゃねぇよ……ってフォークどこにいった？」
とりあえずケーキを食べようとフォークを探していると、2階の階段から人が降りてきた。ロングの銀髪で眠そうな顔をしていて、不思議な雰囲気をした女の子だ。
「フォークが飛んできたんだけどこれ誰の？」
「あ、すみません。おれのです」

「はい」
「あ、ありがとうございます」
「君たちも新入生？」
「はい、そうですけど……」
おれがそう答えるとジッとおれ達のことを見回したあと、口を開いた。
「遺跡やダンジョンに興味ってある？」
「は？あ、いや、まあ多少は……」
「そう」
そう言うと再び2階へと戻っていく。えっと……なんだ今の？
「ルドラ、彼女のこと知っているか？」
「う～ん、記憶にないねぇ。この学園は広いから僕だって会った事ない人はたくさんいるしね」
「まあ、いいか。さて、ケーキでも食べるかって……」
いつの間にか皿の上からケーキが消えていた。そしてルミエルもいなくなっていた……おそらく剣の中に戻ったんだろう。ケーキ少しも食べてないぞ……
「はい、あ～ん」
レティがケーキをフォークに差しておれに突き出してくる。どうやら分けてくれるらしい。
「お、ありがとう。……うわ、すごくおいしいな」
「へへへ、本当においしいよねぇ」
こんなにおいしいケーキを食べたのは初めてだ。城にだってここまでの物はなかったぞ。本当にサーシャさんは何者なんだろうか。
「甘いですねぇ」
「コーヒーはブラックにすればよかったかな」
「あ～おいしかったねぇ」
「ええ、あんなにおいしい物、初めて食べました」
「うんうん、また食べに行こうね」

「みんなに満足してもらえてよかったよ。案内した甲斐があったね」
家に到着し、みんなで大部屋に集まってのんびりくつろぐ。
「さてと、わたし部屋の片づけやってくるね～」
レティが席を立って自分の部屋へと向かう。喫茶店の目の前にあった雑貨屋に先生からもらった収納のスクロールと同じものがあったので、レティはいくつもそれを買い込んでいた。おそらくあの大量の荷物を小分けにして仕舞っておくんだろう。
「おれも少し荷物の整理してくるよ」
「じゃあ、また後でね。夕食の頃になったら呼ぶと思う……って夕食どうしようか？僕はほとんど作れないんだけど……」
そういえば城にいたときは食事は勝手に出てくるものだったから考えもしなかった。一応父に連れられて山で修行したときは、川魚を釣って焼いて食べたことはあるが……料理って言わないよなぁ。
「味には自信はないですが……一応作れます」
シルフィがおずおずと手を挙げる。
「う～ん、ずっとシルフィに作って貰うのも悪いしなぁ。まあ、後で考えようか。今日のところはお願いできるかな？」
「わかりました。でも別にお料理は嫌いじゃないですし、普段から作っていたので別に毎日でも構いませんよ？」
「まあその辺の事は後でと言うことで、なにか必要な物ってあるかい？」
「う～ん、ちょっと待ってくださいね」
シルフィは台所をゴソゴソと探る。
「道具は一通り揃っているので、材料だけですね。皆さん何か食べたいものってありますか？」
「う～ん、特にないかな」
「僕も特にないかぁ」
「ではカレーにしますね」
「材料メモしてくれたら買ってくるよ」
「じゃあお願いしますね」

シルフィの書いたメモを取るとルドラは部屋を出て行った。何か手伝った方が良いんだろうが、手伝える事が思いつかないな……。とりあえず部屋に戻るか。
「なにか手伝えることがあったら呼んでもらえるか？多分部屋にいると思うから」
「はい、わかりました」
おれは部屋に戻って荷物整理の続きをする。と言っても荷物がそれほど多くないからすぐに終わってしまった。……そういえばレティって整理なんてしたことないよな。大丈夫だろうか？
心配になったのでレティの部屋に行くことにした。
「入っていいか？」
「いいよ～」
扉を開けて入ると中はベッドとその脇にあるスクロールの束以外は何もなかった。いや、便利な物だとは思うけどさ……。
「綺麗になったでしょ？」
「いや、綺麗になったけどさ……。せめて机くらいは出しておけよ」
「間違って仕舞っちゃったんだけど、どれに入れたかわからなくなっちゃったんだよね……」
「……」
「まあ、そのうちみつかるよ！！」
「ハァ……」
とまあ、そんな感じで話をしていたらルドラも帰って来て。みんなでカレー作りを不器用ながらも手伝ったり、談笑しながらカレーを食べたりなど、何事もなくその日を終えた。

失敗

「魔法は大きく分けると三つの系統に分けられる。発生、干渉、召喚だ。発生は空間に存在しないはずの物を発生させる。例えば炎や雷などを発生させる魔法だな。次に干渉だがテレパシーや身体強化などがそうだ。最後に召喚だが、これは発生とは違いこの世界に存在している者を呼ぶ魔法だ――」

教室の前で龍のぬいぐるみがフワフワと飛んで黒板に文字を書きながら魔法について説明している。レリオス先生だ。その横に小さな女の子、ソフィ先生がいる。

「――まあ、基本以外の魔法は2つ以上の性質を持った魔法が殆どだから正しい分け方とはいえないかもしれないがな。ただ……お、もう時間か。この続きは次回の授業で話す」

鐘の音が授業の終了を知らせる。初日からなのに結構がっつり授業やるんだな……。今日は全部で三つの授業が行われたが歴史、語学、魔法で全部座学だった。昔から勉強はあまり好きじゃなかったから結構つらい。

「次はみんなに魔法を挑戦してもらうから楽しみにしててね～」

そう言ってソフィ先生はレリオス先生を抱きかかえながら部屋を出て行った。

「終わった～！！早くお昼に行こうよ！！」

「わかったから引っ張るなって」

レティはおれよりも勉強嫌いだからな……。授業が終わったことがすごく嬉しそうだ。

「海猫亭でよろしいでしょうか？」

シルフィはおれ達とは逆に勉強が好きなようで、楽しそうに授業を聞いていた。

「あれ？もう終わったのかい？」

ルドラは机から顔を上げて欠伸をした。こいつ……寝てたのか。

後ろの席だから全然気付かなかった。
「うん、終わったよ～。じゃあ海猫亭へレッツゴー」
レティは右手を上にあげて教室の外へと向かう。おれ達はそれに続いて海猫亭へと向かった。

「いらしゃい。お、また来たね？」
結構急いで来たつもりだったが、席が殆ど埋まっていた。おれ達はサーシャさんに奥の席へと案内された。注文を聞かれたので、おれとルドラはサンドイッチを、レティとシルフィはオムレツを頼んだ。
「これからどうしようか？」
「う～ん、いろいろあったせいで結局は塔の見学できなかったから行ってみる？」
「そうだな、ルドラもいるから迷うことはもうないだろ」
これからの予定も決まったので、料理を待つ間に雑談をしていたら、誰かが話しかけてきた。昨日フォークを拾ってくれた女の子だ。今日気付いたのだが実はクラスメイトだった。
「話がある」
「ん？なんだ？」
「グゥ～」
グゥ～？……どうやらお腹が空いているようだ。
「とりあえず食べながら話さないか？ほら、こっちに座ってくれ」
彼女はコクリと頷き席に座る。彼女が座ると同時にサーシャさんが料理を運んできた。
「おまちどう。おや？いつの間に増えてるね」
「これ、お願い」
彼女はおれの目の前に置かれたサンドイッチを指さす。
「はい、まいど」
サーシャさんはそう言って再び店の奥へと戻っていった。
「ところで君の名前は？」

名前がわからないと不便なのでとりあえず簡単な自己紹介をすることにした。
「ティア」
愛称か？……まあ良いか。とりあえずティアと呼ぶことにした。
「おれはヒュージクリフ。ヒューって呼んでくれ。こっちからシルフィ、ルドラそしてレスティだ。よろしくな」
おれがそう言うとティアは頷いた。
「で、話ってなんだ？」
「集団で活動すれば学園から援助があるって聞いたのだけどそれのお誘い」
そういえば説明を聞いたな。あまり良く覚えていないが自分を高めるための活動を集団で行う場合、援助がでるとか。ソフィ先生曰く、実際は趣味とかが合う者同士が集まって活動するお遊び的な人たちも多いらしいが……
「……とりあえずどんな事をするのか教えてくれるか？」
「トレジャーハント」
「それってお宝探しだよね？楽しそう！！」
レティが満面の笑みを見せながら手を叩く。トレジャーハントって確か遺跡とかダンジョンとかに潜ってお宝を探すんだったか？
レティが好きそうな事だな……
「それって結構危険なんじゃないか？そんなのに許可が下りるのか？」
「いろいろと条件付けられた」
そう言って条件について話し始めた。

条件は3つで、まずメンバーが5人以上いること、次に先生の同伴、そして特殊な魔法を受けてから活動を行うことである。メンバーはおれ達がティアに協力すれば5人だな……。そして先生はどうやらソフィ先生に協力してもらえることになったらしい。そして特殊な魔法は一定以上の怪我を負った瞬間、または自分の意志で学園

まで転移される魔法だ。ずいぶん便利な魔法があるんあるんだな。
この学園には多くの人達がさまざまな活動をしているらしい。トレジャーハントのような趣味？みたいな事だけでなく、盗賊や魔物の退治などの依頼を受けて活動する人たちや商売などをやっている人達などもいるらしい。この学園はもともと魔王との戦いによって受けた被害から、国を立て直すために作られたと聞いているが本当にいろいろな事をやっているな……
……いくら安全対策を取るからと言ってダンジョンとか潜るのはレティに危険が及ぶ可能性があるし断るか。
「すまないが他をあたって……」
「やるやる！！もちろんヒューもやるよね？」
なにがもちろんだよ……そんなにキラキラした目で見るないでくれよ。
「シルフィとルドラはどうするんだ？」
断ってくれるように祈りながら二人に尋ねる。
「う～ん、どうしようかねぇ」
ルドラはニヤニヤしながらこっちを見ている。こいつ絶対わかっているな……。シルフィは……レティと楽しそうに話している。こうなったら……
「返事は今すぐじゃなくていいか？」
そう聞くとティアはコクリと頷いた。
「じゃあ明日また教室で話そう。ほら料理が来たぞ」
サーシャさんがティアの頼んだ料理を運んできてくれた。う～ん本当にどうしたものか……
「あ～もしもしヒュージクリフですがウェルナ様はいらっしゃいますか？」
おれは自分の部屋に戻り、通信用の魔導機を使って王宮に連絡を取った。ウェルナ様ならレティを止めてくれるだろう。そう思っていたが……

「ヒュージクリフ様ですね。申し訳ありませんがウェルナ様はお出かけになっておられます。シルベイン王でしたらいらっしゃいますが変わりますか？」
「いえ……いいです」
あの方なら止めるどころか逆に喜んで賛成しそうだ……。こんな時にウェルナ様がいないなんて……
「では、失礼しま……おや？君誰からだい？」
魔導機の向こうから別の人の声が聞こえる。この声は……
「おお、ヒュー君！！そっちはどうだい？」
やっぱりシルベイン様だ……
「まだ始まったばかりなので何とも言えませんが楽しそうではありますね」
「それは良かった。ところで何か用事かい？」
「いえ、特に何も……」
「ふむ……あ、ソフィそちらで何か面白い事が起きていないかい？ふむふむ……なるほどねぇ」
ソフィ先生に連絡取りやがった！！　しかもソフィ先生もこの事知ってるのか！？
「そういうことなら僕が反対するわけがないじゃないか。もしかして断られると思ったのかい？心外だなぁ」
「……」
「とりあえずレティにも連絡しといたから。じゃあ元気で」
「え、はやっ！！ちょっと待って……切られた」
はぁ……これって事態が悪化してるよな？　どうやって断るか考えていたら、部屋の戸が開きレティが飛び込んで来た。あ～あ、本当に嬉しそうな顔してるなぁ
「お父様がやって良いって！！ヒューが頼んでくれたんだってね。ありがと～～！！」
「ハハハ……」
あのクソ王、絶対わかっていてやってるだろ……

企み

「フンフンフ～ン」
ソフィが鼻歌を歌いながら何かの書類を書いている。こいつの機嫌が良い時は大抵ろくなことが起こらないから不安になる。
「なんだそれは？」
覗き込んでみると特別活動申請書と書かれていた。
「ん？何って仕事の書類だよ～」
「ふむ、それはご苦労なことだが……なぜ目を逸らす？」
「え、え～っと窓の外が気になって……あ、もうこんな時間だ！行かなくちゃ！！」
そういうと逃げるように職員室を出て行った。いったい何を企んでいるのだろうか……とりあえずアレクに話しておくか。
背中に付いた小さな羽を動かして浮かび上がり、職員室から出て転送室へ行く。そして最上階へと移動してアレクの部屋へ向かう。最近はほとんどぬいぐるみの姿だが慣れてくると意外と動きやすいと感じるようになってきた。アレクの部屋の扉をノックし中に入る。アレクは大量の書類の整理をしていた。
「何か用ですか？レリオス」
「ああ、ソフィが何やら企んでいるようだ」
「……またですか。止めても無駄ですのでほっといてください」
「大丈夫なのか？」
「大丈夫じゃないですよ。でも下手に手を出しても悪化するだけですし、彼女のやることですから人死には出るような事はないでしょう」
アレクの書類整理の手は止まらず、顔色も変わっていないように見えるが部屋が暗くなった様に感じるのは気のせいだろうか……
「忙しいようだし、そろそろ失礼するぞ」
「報告ありがとうございました」

部屋を出るため扉に手を掛けようとしたが、突然扉が開き吹き飛ばされる。
「アレク！！これお願いできるかな！？」
「なんですか突然……ふむ……」
ソフィが持って来た書類を見てアレクが考え込む。そして書類を見終わると頭を抱えてため息をついた。その書類を除いてみるとそこにはシルフィ達の名前があった。1人見知らぬ名前が書かれているな、ティルテア？　いや、どこかで見た覚えがあるぞ……
「なんだこれは？」
「げ、レリオスいたんだ」
「簡単に説明するとみんなで集まって何かするから援助してくれって事ですね。この場合は……遺跡やダンジョンの調査ですね。確かにこういった活動は許可していますが、レティたちの事をあなたは知っているはずですよね？それにこの子も……」
そうか思い出した。要注意リストの中の一人だ。ふむ、たしか……
「もうわかってるって、でもどんな事情だろうと特別扱いはいけないと思うなぁ。一応ルークにだって許可取ってるんだよ？」
「あなたは物事を軽く見すぎなのですよ……いえ、これはいい機会かもしれませんね。少々話を聞いてもらって構いませんか？」
「ん、なんだ？」
「うん、いいよ～」
「では……我々が魔王を倒しました。ですがそれですべてが解決した訳ではありません。まずは――」
……聖職者が聞いてあきれるな。常識人の面をしながら相変わらず食えないやつだ。

ティアから話を持ちかけらてから1週間後、おれ達の住む家の大部屋にソフィ先生とティアとおれ達は集まった。全員が席に着き静かになると先生が口を開いた。
「アレクが許可をくれたよ。みんなおめでとー！！」

おれは思わず顔を覆い机に突っ伏した。学長……あなたが最後の希望だったのに……。
「やったー！！遺跡探検ってロマンだよねぇ」
「私も楽しみです。でもお父様にまだこの事を話していないのですよね……」
「ん、レリオスなら大丈夫だよ。今手頃な遺跡を調べてきてもらっているんだ」
「え、お父様が？」
「うん、できれば来週の休みくらいに君たちが挑戦できるようにしたいんだよね」
「ずいぶん早いですね……」
「あんまり遅くなるといろいろなイベントがあるからね。例えばテストとかね」
そう言ってソフィ先生はにやりと笑った。まだ一週間くらいしか授業を受けていないのでそれほど難しい内容ではないので今のところ心配はな……魔法を除けばないな。本当にどうしよう。レティに聞いても全然理解できないんだよな……。今度ルドラかシルフィにも聞いてみるか。
「まあ、それまで君たちは勉学に励みたまえ～」
そう言ってソフィ先生は煙のように消えて行った。入学式のときのデモンストレーションでこの移動法に嵌ったらしい。見た目だけでなく中身も子供っぽい人だよなぁ。
「そういえばルドラって、剣か魔法のどっちか結構使えるのか？」
「う～ん、どっちもそこそこってところかな。魔法は父の影響か回復魔法が得意で、剣は母に少し教えてもらったぐらいかな。どっちにも全然敵わないんだけどね」
「あの方たち敵うくらい強くなるのは無理だろ」
「まあ、デタラメだね」
「だよな」
おれ達は二人揃ってため息をついた。おれの父もシルベイン様の

剣技指南役を務めていたこともありかなり強い。最近は多少食い付けるようになったものの全然勝てる気がしない。シルベイン様とも手合せしてもらったこともあるが全然歯が立たなかった。父の話では今ではシルベイン様の方がはるかに剣腕が立つらしい。アレクもそのデタラメな人達を目標に頑張っているのだろう。

「シルフィ今日習った魔法練習しに行こうよ」

「はい、良いですよ」

シルフィがレティに引きずられるようにして部屋を退出した。おれとルドラ、そしてティアが残された。ルドラはともかくティアはどうも掴めないんだよな……

「ティアは魔法得意なのか？」

そう聞くとティアは首を傾げて少し考えてから

「……微妙」

少し悲しそうな顔をして答えた。どうやら苦手なようだ。

「何か得意な物とかあるのか？」

「弓」

「弓？へぇ～今度見せてもらえるか？」

そう言うとコクリと頷いた。おれの国では弓を使う人は少ないからちょっと興味をそそられるな。たしか隣国のダーマレスカに名手が多いと聞いたことがあるな。ティアもそこの出身なのだろうか？

「ところでなんでトレジャーハントなんてやろうと思ったんだ？」

「……」

「いや、別に嫌なら言わなくていいから」

おれがそう言うとコクリと頷いて席を立った。

「そろそろ時間だから」

そういえばもう夕飯の時間だった。そろそろ準備しないといけないな。結局まともな料理を作れるのはシルフィだけだった。全員でシルフィに料理を手伝いながら教えてもらい、作れるようになったら交代で作ろうという話になった。

家まで送ろうとしたが断られたのでとりあえず家の前で見送る事

にした。家の前にはシルフィとレティが今日習ったライトの魔法の練習をしていた。シルフィは手のひらの上に光の球体を出すが固定できないようですぐに弾けてしまい消えてしまうようだ。レティは5つぐらいの光の玉を出して体の周りをぐるぐると回して遊んでいる。レティは昔からなんでもやる気になるとすぐに上達して大抵のことは出来てしまう。周りの話だとこの国の王族はみんなそうらしい。何か不公平だなと言ったら、お前がいうなと頭を叩かれたことがあったが……

「じゃあな」

おれが手を振るとティアもコクリと頷き、手を振りかえしてくれた。ティアが建物の角を曲がるまで見送り、レティ達に声を掛けた。

「そろそろ夕飯の準備するぞー」

「はい、わかりました」

「わかったよ〜」

そして三人で家の中へ入り台所へと向かう。

「おいレティ、まぶしいからそれ消してくれないか？」

「え〜せっかくたくさん作ったのに」

「う〜ん、どうしたらそんなにうまく作れるんでしょうか……」

出発

連休の前日、授業が終わった後リオール学園北門に集まった。おれは馬車の御者台に座り、馬車の中にはレティ、ルドラ、シルフィ、ティア、ソフィ先生の5人が乗り込んだ。馬車は中型のよく商人が使っているような幌馬車であまり大きくないが5人乗ってもそれほど窮屈ではなさそうだ。馬車の先には一頭の栗毛の馬が繋がっている。がっしりとした体格と艶のある立派なたてがみから名馬である事がうかがえる。

「じゃあ、しゅっぱーつ！！」

レティの掛け声と共に馬車が動き出した。おれは何もやっていないのにこの馬賢いな。おれ達が向かう遺跡はリオール学園から馬車で半日とかからない場所にある。ソフィ先生の説明によるとその遺跡は旧時代の物らしい。旧時代とは約３０００年前、魔王が表れる以前の時代のことで、その時代の人々は今よりも遥かに栄えていたらしいが、魔王の出現により滅ぼされてしまった。魔王がなぜ出現したのかはわからないが死んでも転生するらしいことと、圧倒的な魔力を持つことが知られている。他にもいろいろと聞いたことがあった気がするが……忘れた。

「あ、そこ右に曲がって」

馬車からソフィ先生が顔を除かせて言った。そうすると馬は右の道の方へと向かっていった。……おれが御者台に座ってる意味ないんじゃないのか？

「この馬ずいぶん賢いんですね……」

「そりゃあ、わたし達が冒険していた時にずっと一緒だった仲間だもん。もうおばあちゃんだけどそこら辺の馬には負けないよ。ちなみに名前はローズちゃんだよ」

「え！老馬だったんですか！？」

毛並も良く、体つきがしっかりしているから全然わからなかった。

あとメスだったんだ……
「とっても賢いから特に操作しなくていいよ。多分大丈夫だと思うけど君は盗賊とか狼とかに注意しといてね」
そう言って再び馬車の中へと顔を引っ込めた。
「わかりました」
そういえば最近学園近くで狼を見たって話を聞いたな……。狼は個々ではそれほど強くないが、集団での狩りに優れていて歴戦の傭兵でもやられることがあると聞いたことある。ソフィ先生もいるし、大丈夫だと思うが少し心配だ。
「ヒュー疲れてない？」
馬車の中からレティが出てきて横に座る。
「いや、まだそれほど長い間座っているわけじゃないからな。さっきから静かだが中のみんなはどうしてるんだ？」
「みんな眠っちゃったよ～。代わる？」
「レティは御者なんてしたことないだろ？この馬は賢いけど一応経験があるおれがやった方が良いだろ。暇なら横に座って景色でも楽しんでいてくれ」
「う～ん、それも良いけどとりあえず魔法の練習でもしておくよ」
そう言って手のひらに光の玉を浮かべる。赤、白、黄、青……とさまざまな色の光の玉を出して体の周りを舞わせる。ライトの魔法だと思うがこの前よりも数が増え、なおかつ色までついている。
「色まで付けられるのか……本当にすごいな」
「そういえばヒューはまだ使えないんだっけ？コツを掴めば簡単だよ？」
「そのコツってのが全然わからないんだよなぁ」
おれがそう言うとレティがおれの手を掴み
「えっと、手のひらの上に魔力を集中させてみて？」
「えっと……こうか？」
「う～ん、全然集まってないよ……。そういえば剣士って無意識に剣に魔力を送ってる場合があるって聞いたことがあるから、剣を持

ってやってみれば？」
「おれもそれは聞いたことがあるけどさ……」
腰に差したルミエルを抜いてもう一度試してみる。
「んぁ？なんじゃいきなり」
剣の中から寝ぼけた声が聞こえた。だんだんと剣の周りの空気が本当にわずかだが歪んでいく。
「そこで光れぇ！！って念じてみて」
おれが「光れ！！」と念じるとルミエルがまぶしいくらいに光輝いた。
「うお？おおお！？」
ルミエルから強い困惑の声が聞こえる。
「おお、出来た……」
「出来た……じゃないわ！！いきなり何をするか！？」
剣の中からルミエルが出てきておれの頭を引っ叩いた。
「あ、ごめん。ちょっと魔法の練習を……」
「せめてわらわに断りをいれんか。起きたら体がピカピカ光っておったらびっくりするじゃろうが」
「本当にごめん、今度何か御馳走するからさ」
「ふん、それならまあいいじゃろう」
そう言って剣の中へと戻った。こいつはおいしい物が食べれれば何でもいいのだろうか？　まあ楽でいいか。
「じゃあ今の要領で手のひらでやってみて」
「ああ、わかった」
えっと手のひらに魔力を集めて光れと念じる。すると……なにも起きなかった
「……できない」
「えっと……ドンマイ！！」
そう言ってレティは馬車の中へと戻っていった。……レティに見捨てられたよ。泣きたくなってきた……

辺りが暗くなってきた頃、遠くに明かりが見えてきた。
「みんなお疲れ。今日はあそこに泊まるよ」
ソフィ先生がそう言うと馬車の中からレティのはしゃぐ声が聞こえた。おれもだいぶ疲れてきていたからありがたい。
明かりの元は小さな村で入ってすぐのところに宿屋と書かれた二階建ての木造の建物があった。
「ちょっと待っててね」
ソフィ先生が中に入ると、中から小さな男の子が出てきておれ達を宿の裏まで案内してくれた。宿の裏には大きな馬小屋が設けられていた。馬小屋の中には馬車も仕舞うことができるようだ。おれ達は馬と馬車を少年に預け宿屋の中へと入った。
「二人部屋と四人部屋をとったから男女で分けで良い？」
中に入るとソフィ先生が質問してきた。
「それで良いと思いますよ。みなもそれでいいよな？」
おれが尋ねると全員から同意の声が返ってきた。部屋が決まり荷物を部屋に置いて再び宿屋の入口に集まった。
「食事に行かないかい？僕はもうお腹が空いてしまって。主人この辺でおいしい料理が食べれるところはあるかい？」
ルドラがそう聞くと宿屋の主人はすぐ隣にある店を教えてくれた。村には料理を出す店がそこしかないがなかなか腕の良い店主が店を開いているらしい。
みんなで宿屋の主人から聞いた店へ行く。店の中に入ると仕事終わりの村人達だろうか、カウンターに座り酒を飲んでいる者もいれば、何人かで集まって談笑しながら飲み食いしている人達がいる。おれ達は開いている席に座り、それぞれ自分の食べたいものと飲み物を注文した。
「さてと、明日の事なんだけどわたしは明日一緒に行かずに、馬車で待機しているから」
「え、来てくれないんですか？」
「だってそれじゃあ君たちのためにならないからね。代わりにこれ

を持っていってね」
　ソフィ先生は鞄から五つの複雑な模様の書かれた銀の腕輪を出した。
「これはなんですか？」
　シルフィが先生に尋ねた
「とりあえず付けてみて」
　おれ達は腕輪を付けてみた。すると、どこからか「聞こえる？」と声がした。
「へ、今のはどこから？」
「その腕輪を付けると念じるだけでわたしと連絡が取れるんだ。それとなんと、わたしが呪文を唱えると！！」
　先生が呪文を唱えるとティアが突然椅子から消えた。そしていつの間にか先生の後ろに立っていた。ティアも驚いて自分の体を見回している。
「このようにわたしのすぐそばに転移させることができるんだ。後は他にもその人が見ている景色を見れたりとかいろいろな機能が付いてるんだ」
　先生……あんまり派手なことしないでください。周りの人が思いっ切り見てるよ……
「すごいですね。これも先生が作ったんですか？」
「もちろん！！でも旧時代の遺跡の発掘物を改造しただけなんだけどね。結構貴重な物だから後で返してね」
　今聞いた機能だけでもこの腕輪家が一つ以上買えるくらいの価値がある気がするのだが……
「まあ、とりあえずみんな明日は頑張ってね。価値のある物を見つけたら学園が買い取ってくれるからね。お、料理が来たよ」
　店主が料理を運んできた。おれの目の前にはここのおすすめだという猪肉のステーキだ。
「お、うまいな」
「わたしのパスタもおいしよ～」

「私のもとてもおいしいです」
「うん、これはなかなか」
「ん……」
「ぷは～やっぱりビールはおいしぃなぁ」

先生が酔いつぶれて大惨事になったり、いつの間にかおれの頼んだ料理がルミエルに食べられていたりと、賑やかに夕食を終えた。おれ達迷惑な客だったろうな……

遺跡探検

「う～、頭痛い……」
ソフィ先生が頭を押さえて馬車のすみに蹲っている。
「弱いのに飲みすぎるからですよ」
ルドラが呆れるように肩を竦める。
早朝に宿を出ておれ達はこの村からさらに北にある森に向けて出発した。途中の道のりは村までの時と同じように特に何もなく目的の森にたどり着いた。森は大量の木々が生い茂っているが日を遮るほどではなく、木漏れ日が森のなかを明るく照らしている。
「どうやらあの森のようですね……ソフィ先生大丈夫ですか？」
シルフィが先生に心配そうに尋ねる。
「うん、さっきよりはマシになってる……。みんなは心配しないで探索頑張って来てね……」
元気なく手を振る先生に見送られながら、おれ達は森の中のはずれに馬車を止め地図を頼りに遺跡を目指す。
「お、あれのことかな？」
遺跡は森に入ってすぐのところにあり、すぐに見つけることができた。見つけた遺跡は窓も何もない石造りの小さな建造物で、蔦などが巻き付いていたりしているが大きな破損などもなくほとんど風化が見られない。
三千年前も昔の建物となれば普通は風化してなくなっているか、そうでなくてもボロボロになっていると想像するが意外なほどに綺麗に残っている。旧時代の建造物は魔法の力なのか、または別の力なのかは不明だが綺麗に残っている物が多い。まあそれも魔物に荒らされていなければの話だが……。
「う～ん、思ったよりも地味？」
レティが少し残念そうにしている。おそらく一都市にも匹敵する大きさのレスカード遺跡やミティシア海空中都市跡とかを想像して

いたのだろう。そういった巨大な遺跡には大抵強大な魔物が多く徘徊しているらしいので、そんなところをレリオス先生が薦めるわけがないだろ……。レリオス先生も情報を集めただけでどんな遺跡かは詳しくわかるわけではないらしいが……。中に入るとすぐに地下へと続く階段があった。長く続く螺旋階段を降りていくと祭壇のある大きな部屋に出た。階段もそうだが壁が光を放っているようで、外よりも明るいくらいだ。

「……神殿？」

ティアがポツリと呟いた。祭壇の後ろに本棚などがあることなど、内装もどことなく叡智の神リーデの神殿に近い。

「ふむ、旧時代から信仰する神はほとんど変わっていないと聞いたことがあるけど、内装とかもほとんど変わらないんだね」

ルドラかそう言った。こいつは授業中ほとんど寝ているから、勉強が嫌いなのかと思ったらほとんど知っていることだからつまらないだけらしい……。学長の子供というのもありそう、そういった知識を得る機会に恵まれていたらしい。旅に出ていたのも、本などで学んだ事を実際に見てみたかったからしい。

「さすがに本とかはほとんど駄目になっちゃってるね」

レティが祭壇の裏にある本棚の本を引っ張りだすと埃が舞い、本もボロボロと崩れ落ちてしまう。

「あっちの部屋を探してくる……」

ティアは階段付近にある扉へと向かっていく。

「あ、それなら僕も一緒にいくよ」

そう言ってルドラがティアの後を追っていく。とりあえずこの部屋はおれとレティとシルフィで探索することになった。

「う～ん、これも駄目、これもぼろぼろだ～」

レティが本棚の本を放り投げながらどうにか読めそうな本を探している。……いくら読めなくなっていてもそんなに乱雑に扱って良いのだろうか。とりあえずおれも本棚を調べてみることにした。

「全然良さそうなものないよ～」

本棚の本が半分くらい床に積み重なった頃、レティがそうぼやいて本棚に寄り掛かった。すると本棚が少し横に動いた。
「ん？」
本棚を押してみると少し重いが横に動く。どうやら本棚に並んでいた本が少なくなったために動きやすくなったようだ。横に動かしていくと地下へと続く階段が表れた。入口の階段とは違いかなり薄暗い。
「隠し階段……だよな？」
「うわぁ……なんだかワクワクするね」
「えっと……お二人を呼んできますね」
そう言ってシルフィはルドラとティアを呼びに行った。
「先に入ろうとするなよ」
「ギクッ……そんなことするわけないよ～。ヒューはわたしを信じてないの？」
案の定、先に入ろうとしていたらしい。釘を刺しておいて正解だったな……
「ハァ……」
思わずため息が漏れる。
「お～い、隠し部屋を見つけたんだって？」
ルドラ達がやってきた。
「ああ、そっちは何かあったか？」
「いや、全然。ベッドとかがある事から寝泊りする場所なのはわかったけどね」
「よし、みんな揃ったし行ってみよう！！」
そう言ってレティはおれの背中を押す。
「わかったから少し落ち着けって」
おれ達はゆっくりと薄暗い階段を降りていく。すると小さい部屋に出た。机と椅子、それと少数の本が置かれている本棚があるだけの小さな部屋に出た。本棚の本を手に取ってみると全くと言っていいほど老朽化していない。

「え～っと……うん読めない！」
レティは本をパラパラと捲った後すぐにパタンと本を閉じた。おれも少し見てみたが全然読めない。おそらく旧時代の言葉、古代語と呼ばれるもので書かれているようだ。
「……貸して」
ティアが本の表紙をじっと見て
「リーデ神、創生神話、リーデ神と他の神々、今日からあなたは料理の達人――」
と本の題名を教えてくれた。ほとんどが神様についての本のようだ。それにしても古代語なんて読めるのか。
「……」
ティアが最後の本を手に取ったところで手を止めた。その本には表紙には何も書かれていなかった。ティアは少し中を見るとすぐに本を閉じてしまった。
「ん、どうした？」
「……それほど古代語出来るわけじゃないから」
多分内容が難しくて訳せないか、又は時間がかかるのだろう。
「じゃあとりあえずこれらの本を持って帰ろうか。もう調べていないところないよな？」
「ああ、もうないと思うよ」
「う～ん、思ったよりも呆気なかったね」
おれ達はリュックに詰め込んで元来た階段を上っていく。

「どうだ、なにかそっちに変化はあるか」
「いや、今のところ特に変化はないよ。そんなに焦ってもしょうがないしのんびり行こうよ」
「何かあったらすぐに我を呼べよ。魔物について調べた結果だがやはりアンデットや死霊の類が増えている様だ。アレクの考えが正しい可能性が高くなってきた……残念ながらな」
「う～ん、まあ悲観しても仕方ないし、とりあえず何が起こっても

良いように対策だけはしておこうよ……って、あれ？」
「どうした？」
「急に周りが暗くなってきた。とりあえず魔法切るよ。何かあったらすぐ呼ぶから」
通信が切られてしまった。何もなければ良いが……

黒い影

遺跡から外に出ると辺りは暗闇に包まれていた。あれ、そんなに長く遺跡にいたっけ？

「ちょっと待ってね」

レティが手の上から光輝く玉を3つほど作り周囲へと浮かばせた。その光球は光によって辺りが照らされ歩く分には困らない程度の明かりをもたらしてくれた。

おれは懐から懐中時計を出し時間を確認する。しかし、まだ4時をちょっとすぎたばかり、夜になるには早すぎだが……

「……霧？」

ティアがポツリとつぶやいた。目を凝らして良く見ると薄らと黒い煙のようなものが辺りに漂っていることがわかった。

「なんだか嫌な気配がします……」

霧のせいかもしれないがシルフィの顔色が若干ながら青ざめて見える。

「嫌な匂いがするするな……」

ルドラはそう言って顔を顰めている。

「おれは何も感じないが……。ああ獣人族は鼻が利くんだっけ？」

「ああ、何かが腐ったような匂いが……だんだん強くなってきてる」

おれはレティによって作りだされた光球によって照らされている木々の隙間を何かが通り過ぎたのを見た。周りを見回すと暗闇に潜んでいるため姿を確認することは出来ないが何者かに囲まれているのがわかった。おれはルミエルを抜き、周りに警戒を促した。

「何かに囲まれている……。レティ光を強くできないか？」

レティはコクリと頷くと再び光球を3つほど作り出した。すると木々の影から犬……いや、狼が姿が照らし出された。数は六匹。闇に溶け込むような黒い毛並を持つ狼が五匹、それとおそらくボスであろうか。他より一回り大きい真っ白な毛並を持つ狼が一匹。狼を

見たのは初めてだが何か違和感を感じるのだが気のせいだろうか……。

「狼……だよね？　……えいっ！！」

レティは掛け声と共に狼に光球を勢いよくぶつけた。だが狼にぶつかると光球はシャボン玉が弾けるように弾けて消えてしまった。多分狼を驚かせようとしたのだろうが……無反応だ。……無反応ってさすがにおかしくないか？　だがそんな事を悠長に考えている暇はないようだ。狼達は徐々に包囲の輪を狭めてきた。

「来るぞ！！」

ボス格の狼がおれの首元に向かって飛びかかってきた。それに合わせるように周りの狼達もそれぞれおれ達に跳びかかってくる。おれは飛びかかってきた狼を横に避けながらルミエルで切り裂いた。だが浅かったのか大量の血を出しながらも起き上りレティへと襲い掛かろうとしている。

「くそっ！！」

レティへと飛びかかる前に狼の首を刎ねた。その後仲間の安全を確かめるため周囲を確認すると。ルドラは二匹を短剣で始末し、シルフィは依然迷宮でも見た精霊――たしかドライアドと言ったっけ――を召喚し三匹を蔦で宙吊りにしている。どうやら全員無事の様だ……。安心してほっと一息つこうとしたした時……おれとルドラが確かに止めを刺したはずの狼たちが起き上り向かってくる。おれが退治した狼など胴体のみでこちらに向かってくる。

「ちょっと待て！？　首が無くても生きてるってさすがにおかしいだろ！！」

「とあえず逃げましょう！！」

おれ達は馬車へ向かい一目散に逃げ出した。途中後ろを振り返ると……5、6、7、いやもっとか……って増えている！！

必死に逃げていると突然周囲の景色がまるで水の中から外を見たように歪んだ。そしていつの間に目の前には御者台に座るレリオス先生がいた。珍しくいつものぬいぐるみの姿ではなく、人の姿をし

ている。……馬車の中？　馬車はかなりの速度で走っているのか、かなり揺れている。
「やあ、みんな大丈夫？」
ソフィ先生が馬車の後方を確認しながら呑気そうに声を掛けてきた。馬車の遥か後方には黒い靄の様なものが見える。
「よし、逃げ切れたみたいだね。スピード落として～」
馬車の揺れが徐々に収まってきた。
「一体あれは何なんですか？　それにいつの間にレリオス先生が？」
「う～ん、レリオスは召喚しただけなんだけど……。うん、詳しい事は後でね」
「おい、このまま真っ直ぐ学園で良いのか？」
「うん、そうだね。他の人に迷惑かける可能性もあるし早く戻った方が良いね。」
「では、少し飛ばすぞ」

とりあえず道中に襲われることはなく、どうにか無事学園へと戻ってくることができた。アレクの待っている学長室に入ると。
「お疲れ様です。あなた方にもいろいろと話したい事があるのですが、とりあえず明日にしますので今日はゆっくり疲れを取ってください」
アレクはそう言ってシルフィ達を下がらせた。実際シルフィ達の顔には疲労の色が濃く出ている。襲われた所為もあるだろうが、かなりの速度で長時間馬車で駆けた所為だろう。
「里へと戻ったフィルルからも連絡が来ました。妖精に伝わる昔話に魔王にまつわる物がありました。それにより我々の考えが正しい可能性がより高まりました。」
「わたし達を襲ってきたアンデットだけど能力は大した事なかったけどあれだけの数を使役するのは普通無理だね。それにあの黒い霧はかなり高位の魔法だと思う……」
「すまぬな。我が少しでも気にしていればすぐにわかる事だったの

だが……」
「いえ、あなたの所為ではないです。気にしないでください。とりあえず今まで我々が得た情報を統制するとかなりの高確率で……魔王は複数いるということになりますね」
「ああ、そうなるな。それに我々にも気付いているようだ。アンデットの能力はそれほどない事から見ると、おそらくまだ完全に覚醒しているわけではないだろうがな……」
「まだ向こうの出方を窺うしかないんだし、考えても仕方ないよ。私はとりあえず家に戻るね。あ、そうだアレクこれお願いね」
そう言ってソフィは大きく膨らんだ麻袋を机に置いて部屋を出ていく。
「あ、ちょっと待ちなさい！！　あなたも古代語読めるでしょう……逃げられましたか」
「では、我も失礼する……」

魔王

扉をノックする音がする。その音にアレクが答えた。
「どうぞ入ってください」
するとレティが扉を開けて入ってきた。
「え～っと、何でしょう？」
レティはなぜ自分だけが呼ばれたのか不思議に思っているらしく。キョトンとした顔をして首を傾げた。
「お呼びして申し訳ありません。重要な話がありまして……魔王の事は知っていますよね？」
「えっと、すごい極悪人で悪い事ばかりやっていたから父様たちが成敗したんですよね？」
「ちょっと要約しすぎだとは思いますが。概ねそのとおりです。……その魔王についてある重大な事が判明しました。」
「重大な事？」
「魔王は複数いることが判明しました。そしてその魔王はすでに転生している可能性が高いです」
「えっと……そんな重大な事を何でわたしなんかに話すんですか？
そんな事わたしに打ち明けられても何もできないんだけど……」
いきなりこんな事言われても普通困るだけだろう。実際レティの顔には困惑の色が濃く出ている。
「何から話せば良いでしょうかね……。とりあえずあなたはその魔王に狙われているのですが……」
アレクが口を閉ざし、難しい顔をして考え込む。学長などやっているから治ったのかと思ったが、相変わらず口下手な奴だ……。
「我から話そう。レティお前の中には魔王の魂が眠っている。魔王の転生の呪いを解除するために魂を　我の中に一時的に封じるつもりであったのだが……ちょっと失敗してな。ウェルナの中に取り込まれてしまった。まあ、結果としてウェルナの勇者としての力なの

かは知らんがその時に魔王の魂に掛かっていた呪いはほとんど解除されたから良かったのだが……。ウェルナの中から魂を取りだし天へと返そうとしたのだが、ウェルナ魂と混ざり合ってしまい、それが難しくなってしまった。無理に出さずとも害はないはずだからほおっておくことにしたのだが、子であるお前に移ってしまったようだ。謝ってすむ事ではないがこれは我のミスだ、本当に申し訳ない」
そう言って頭を下げた。すると少しばかりレティの様子がおかしい。何かを我慢しているような……
「……どうした？」
そう尋ねると慌てて手を顔の前で振りながら
「あ、ごめんなさい。ぬいぐるみの姿でそんなに神妙な顔で喋られると……かわいいなぁって……」
確かにこの体だと滑稽に見えるかもしれんが呑気だな……さすがはあ奴らの娘と言ったところか。
「魔王についての事はソフィから話が行くと思うが、お前に関しての事を他の奴に伝えるかは自身で決めるがいい」
そう言うとレティはコクリと頷いた。
「後でソフィからより詳しく魔王についての話があるだろう。魔王についてはその時詳しく聞くと良い。話は以上だ。」
「わかりました。では失礼します」
そういってレティは部屋を出て行った。それにしても本当に動じておらんな……。適当で呑気なのはシルベインに似だな……いや、動じないところはやはりウェルナだろうか？　おっと、そろそろ明日の授業の準備をしなくてはいかんな。

魔王（後書き）

どうも、ユウキです。物語を書く参考にしようといろいろと本を買い漁っていたら机の上に山が出来てしまいました……２０冊くらい。ごめんなさい、読むの楽しくてこんなに遅くなってしまいました。

一応これで2話が終わりなので反省でも……というか反省しかありません。もっとプロットをしっかり作っておけば良かったと後悔してます。話の進行も強引で、登場人物も自分の力量に対して増やしすぎて全然生かせていません。一話をいろいろと修正しようとしたりしたのですが、なんだか新しい物を書き始めた方が良いんじゃないかな……って思ってしまいました。いろいろと心折れそうですが、とりあえず完成はさせようと思いますので、生暖かい目で見守ってくださるとありがたいです。ここまで読んで下さり本当にありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3183q/

英雄の子供たち

2011年10月8日13時19分発行